

主要地方道長野大町線  
埋蔵文化財発掘調査報告書

—美麻村内—

せん み 遺 跡  
千 見 遺 跡

1994

長野県大町建設事務所  
（財）長野県埋蔵文化財センター

主要地方道長野大町線  
埋蔵文化財発掘調査報告書

—美麻村内—

せん み 遺 跡  
千 見

1994

長野県大町建設事務所  
（助）長野県埋蔵文化財センター

## 序

主要地方道長野大町線は、善光寺平を国道19号線で犀川沿いに谷あいを通り、長野市七二会館平で分岐し、土尻川沿いに中条村、小川村、美麻村と通り、中山山地をこえて大町市に至ります。この道は、古くから大北地方と善光寺平を結ぶ交通路として重要な役割を果たしてきました。ところが平成3年に冬季オリンピックの長野開催が決まり、会場である長野市と白馬村を結ぶ幹線として、整備されることになりました。今回調査を実施した美麻村千見遺跡は、その改良にともない対象となった遺跡であります。

遺跡は、北安曇郡と上水内郡の境、小川村からわずかに美麻村に入った、土尻川の河岸段丘上に立地します。歴史的にみますと、古くは縄文時代前期の滑石製品が多数出土し著名な女大原遺跡をはじめとしたいくつかの縄文時代の遺跡があります。再び戦国時代になって歴史の表舞台に大きく登場します。背後にある峻険な山城千見城は、武田、上杉、小笠原氏により幾度となくはげしい争奪戦が繰り返されました。つづく江戸時代には松本藩と松代藩の領地境として番所が置かれるなど、中世から近世を通して、この地が境界として重要な位置を占めていたことが解ります。そして美麻という村名が示すように、一帯は麻の産地として著名であったと考えられます。

調査の内容につきましては、すでに当センターの年報・速報展等で、その一端を紹介してまいりました。着手する際は、以前より存在が知られていた近世寺院「善福寺」の解明が大きな課題でありましたが、調査が進むなかで縄文時代から近世にわたる生活の痕跡を認めることができ、本書に収録することができました。美麻村の歴史に、新しい知見をわずかではありますが加えられたと自負しております。

最後になりましたが、発掘調査を開始する段階から本報告書の刊行にいたるまで、深い御理解と御協力をいただいた、長野県大町建設事務所、地元美麻村、同教育委員会、地元千見地区の方々、発掘・整理作業に従事協力された多くの方々、また適切な御指導・御助言をいただいた長野県教育委員会文化課と、本書の刊行までこぎつけた本センターの職員の方々の努力に対し、心から敬意と感謝を表す次第であります。

平成6年3月31日

財団法人 長野県埋蔵文化財センター

理事長 佐藤 善處

## 例 言

- 1 本書は長野県北安曇郡美麻村千見に所在する千見遺跡の、県道長野大町線改良事業に係わる発掘調査報告書である。これまでにセンターの年報などで調査の概要を紹介してきたが、本報告をもって正式な報告とする。
- 2 遺跡略称はセンターの方式に基づき、長野県全域をアルファベットで区域割したなかで、大町市・北安曇郡にあたるFを冠し、地籍名である千見 (sennmi) のSとMをとって〔FSM〕とした。
- 3 発掘調査は以下の体制で行われた。  
事務局長 峯村 忠司 事務局総務部長 神林 幹夫 事務局調査部長 小林 秀夫  
長野調査事務所所長 岡田 正彦 整理課長 原 明芳  
調査研究員 市川 隆之・臼居 直之・上田 典男・西山 克己  
発掘調査は全期間を通じて市川が担当し、臼居・上田・西山が交代で参加した。
- 4 整理は以下の体制で進められた。  
事務局長 峯村 忠司 事務局総務部長 神林 幹夫 事務局調査部長 小林 秀夫  
長野調査事務所所長 岡田 正彦 整理課長 原 明芳  
調査研究員 市川 隆之(遺構・遺物整理、原稿執筆、編集)・白沢 勝彦(保存処理)  
西島 力(遺物写真撮影、遺構写真焼付け)
- 5 本書で使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図、美麻村発行の5千分の1山林基本図を複写したものである。
- 6 本書で使用する遺構記号は柱穴・土坑—SK、礎石—獨立柱建物跡—ST、溝跡—SD、槽跡—SA、集石遺構—SH、遺物集中—SQ、不明遺構—SXとした。なお、獨立柱建物・槽跡の柱穴はすべてSKとして通し番号をつけ、本報告や遺物の注記もこの番号で通している。個別SKと建物の関係については巻末の表を参照されたい。
- 7 遺物実測図のスクリーンパターンは、以下の事項を表わしている。



- 8 本書で掲載した図版の縮尺は個別に記載している。
- 9 発掘調査、および整理作業において以下の各氏にご指導いただいた。記して感謝の意を表したい。  
周辺遺跡—島田哲男・篠崎健一郎・小山岳夫・美麻村教育委員会・高附武男  
出土陶磁器—藤沢良祐・仲野泰裕
- 10 本書で報告した各記録、及び出土遺物は県立歴史館で保管している。

## 本文目次

<b>第1章 遺跡および調査の概要</b> .....	1
第1節 遺跡の概要.....	1
第2節 調査にいたる経過.....	1
第3節 調査の概要.....	2
1 調査の体制.....	2
2 調査の方針.....	2
3 調査の方法.....	2
4 調査の経過.....	4
5 整理作業.....	4
<b>第2章 遺跡の位置と環境</b> .....	5
第1節 遺跡地の伝承.....	5
第2節 遺跡周辺の歴史的環境.....	5
1 遺跡の分布.....	5
2 現景観と遺跡周辺の伝承・史跡.....	5
(1) 現景観.....	5
(2) 地籍図と地字名.....	9
(3) 千見城.....	9
(4) 番所について.....	11
3 まとめ.....	11
第3節 遺跡周辺の地形と地質.....	11
1 地形概観.....	11
2 遺跡周辺の地形と土層.....	12
<b>第3章 発掘調査の結果</b> .....	14
第1節 地形と土層.....	14
第2節 検出された遺構と遺物.....	15
1 平安から近代の遺構・遺物.....	15
(1) 遺構検出土層と整地.....	15
①段丘東傾斜域.....	16
②北西部.....	17
③中央西部.....	18
(2) 遺 構.....	19
①建物跡 ST 1・ST 2・ST 3・ST 4・ST 5-7・ST 8・ST 9.....	19
②柵列跡 SA 1・SA 2.....	23
③土 坑 SK35・SK47・SK134・SK123・SK93・SK137・SK10・SK 4.....	24
④溝 跡 SD 1・SD 2・SD 3・SD10・SD17・SD13・SD18・SD11・SD14~18.....	27
⑤集石遺構 SH 1・SH 2.....	29

⑥その他の遺構 SX1・SX2	29
(3) 遺物	35
①焼物	35
②ガラス	36
③金属製品	36
④石製品・土製品	37
(4) 小結	37
①平安時代以後の焼物	37
②遺構の変遷	41
2 縄文時代の遺構と遺物	44
(1) 包含層と基本土層b群上面検出遺物	44
(2) 基本土層b群中の遺構 SF1	44
(付)千見遺跡SF1出土炭化物の年代測定	パリノ・サーヴェイ株式会社46
<b>第4章 成果と課題</b>	<b>47</b>
1 縄文時代後期	47
2 平安時代	47
3 戦国時代	48
(1)千見城の展開	48
(2)千見城と遺跡の関係	49
4 江戸時代	50
(1)善福寺について	50
(2)善福寺と調査地の関連	51
(3)調査結果から派生する問題	51
①江戸時代前半の善福寺	51
②現景観との関連	51
5 残された課題	52

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	第12図 千見本村地籍の字名
第2図 発掘調査地点	第13図 松本平第四紀編年表
第3図 グリッド設定とトレンチ配置	第14図 千見周辺の河岸段丘と土尻川左岸見通し
第4図 文化課試掘地点	第15図 千見遺跡土層構成の模式
第5図 往時の千見学校	第16図 遺跡地形概念
第6図 千見学校の変遷	第17図 千見遺跡基本土層
第7図 周辺の遺跡分布	第18図 東段丘傾斜域のテラス重複状況と土層
第8図 遺跡周辺の史跡	第19図 調査城東部の各調査面
第9図 表2の時代別遺跡数の集計	第20図 区整地I・II分布範囲
第10図 千見本村現景観のモデル	第21図 ST1
第11図 千見本村地籍の現景観	第22図 ST2

第23図	ST 3
第24図	ST 4
第25図	ST 5 ~ 7
第26図	ST 5 ~ 7 の柱穴
第27図	ST 8
第28図	ST 9
第29図	SK 4 ・ 10 ・ 35 ・ 47 ・ 93 ・ 123 ・ 134 ・ 137
第30図	SD配區, SD 1 ~ 3 ・ 17実測図
第31図	SD11 ・ 14-16の変遷
第32図	SD13
第33図	SD18
第34図	SH 1
第35図	SH 2
第36図	SX 2
第37図	出土焼物(1)
第38図	出土焼物(2)
第39図	出土焼物(3)
第40図	出土焼物(4)、ガラス製品

第41図	出土石・金属・土製品
第42図	出土貨銭
第43図	碗分類
第44図	出土焼物年代別個数と器種構成
第45図	碗の焼物種別構成
第46図	遺構変遷の概略
第47図	遺構の主軸方向
第48図	戦国時代から近代の遺構変遷
第49図	SF 1
第50図	縄文包含層分布と調査範圍
第51図	出土石器
第52図	出土縄文土器
第53図	福田アジオ氏によるムラの領域の模式図
第54図	遺構全体図
第55図	ST 1 ~ 3
第56図	ST 5 ~ 7
第57図	ST 8 ・ 9

## 挿 表 目 次

表 1 調査進行状況

表 2 周辺の遺跡一覧

表 3 碗の遺構別出土状況

表 4 SK一覽

表 5 遺構別遺物出土状況

## 写 真 目 次

PL 1 遺跡周辺

PL 2 遺跡遠景・調査前風景・整地上面

PL 3 段丘東傾斜地各調査面

PL 4 段丘東傾斜地調査面・各整地・遺構 1

PL 5 遺構 2

PL 6 遺構 3

PL 7 遺構 4

PL 8 遺構 5

PL 9 遺構 6 ・ 調査終了状況

PL 10 平安時代～近代の焼物 1

PL 11 平安時代～近代の焼物 2

PL 12 平安時代～近代の焼物 3

PL 13 平安時代～近代の焼物 4

PL 14 平安時代～近代の焼物 5

PL 15 平安時代～近代の焼物 6

PL 16 平安時代～近代の焼物 7 ・ 石製品・土製品・鉄製品

PL 17 平安時代～近代の銅・ガラス製品、縄文時代の土器・石器

## 第1章 遺跡および調査の概要

### 第1節 遺跡の概要

長野県北西部、松本平と善光寺平の間には低い山地が横たわり、これをぬって土尻川が流れる。千見遺跡はこの河岸段丘に立地し、遺跡周辺は独自の生活文化をもちつつも、二つの盆地をつなぐ回廊、あるいは政治的境界となる多彩な歴史の顔をもつ地域として知られる(第1図)。このような環境のもとで遺跡は明治時代の学校所在地、江戸時代寺院の伝承地になっている。今回の発掘はそれらの痕跡の確認と数少ない土尻川上流域の調査例としてより古い様相の解明が期待され、一応の成果を挙げる事ができた。

### 第2節 調査にいたる経過

平成3年に、1998年冬季オリンピックの長野開催が決まり、競技会場間の交通網の整備が急がれることとなった。主会場の長野市と白馬村の間は、従来よりある主要地方道長野大町線の改良で対応することとなり、美麻・白馬村内は北安曇郡・大町市を管轄する長野県大町建設事務所により整備が進められ、埋蔵文化財包蔵地として、美麻村では千見遺跡が対象となった(第4図)。

従来、長野県教育委員会は埋蔵文化財保護について、高速道路・新幹線などの県規模の広域に渡る事業への対応は助長野県埋蔵文化財センター(以下「県埋文センター」)、それ以外については当該市町村で担当することを原則としてきた。このため今回の事業は原則的に、後者に当てはまるわけだが、長野県



第1図 遺跡の位置(国土院発行20万分の一地形図に県教委「歴史の道調査報告XV」1985を参照加筆)





第2図 発掘調査地点（スクリーントーン範囲）（ $S=1/1500$ ）

教育委員会文化課により地元美麻村教育委員会をはじめとした関係機関で調整が計られた。その結果、オリンピック開催が広域的な県的事業と位置づけられ、長野県大町建設事務所が委託者、県埋文センターを受託者とする契約が締結され、千見遺跡の調査を平成4年度に実施し、5年度に報告書を刊行することとなった。

### 第3節 調査の概要

#### 1 調査の体制

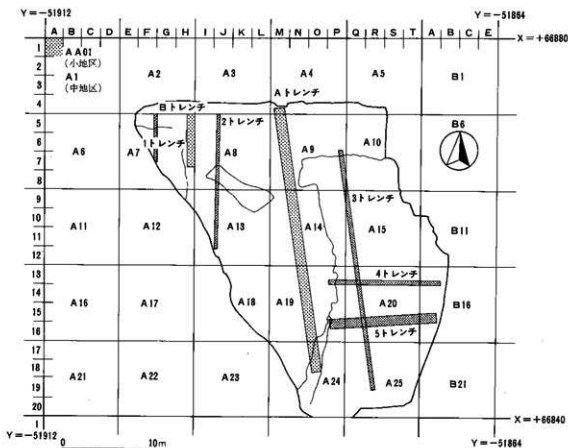
長野調査事務所は先の協議を受けて調査体制の編成に入った。この当時、長野調査事務所は調査課と整理課で構成されていたが、調査課が高速道関連の調査を継続していたことと、本遺跡の調査が短期間で終了する見通しから整理課の担当が決まった。しかし、本務も継続させるために全期間を通じての担当者は1名とし、他の2人が交替で補助する体制を組み、平成4年の7月6日より8月7日までの約1カ月の予定で調査に臨んだ。

#### 2 調査の方針

試掘の結果、千見遺跡は完新世に離水した河岸段丘に立地し、中世末から近代を中心とする遺跡であると推定された。さらに伝承より善福寺、千見学校の所在地とされることから以下の課題を設定した。基本的には遺跡の環境と変遷の把握を目的とし、特に中世末では千見城との関係、江戸時代は善福寺、明治時代は千見学校の各様相の解明に留意することにした。更に、中世以後の遺跡の様相を地域のなかで捉えるために、文献や現景観といった考古資料以外の史資料も併せて考えてみることにした。

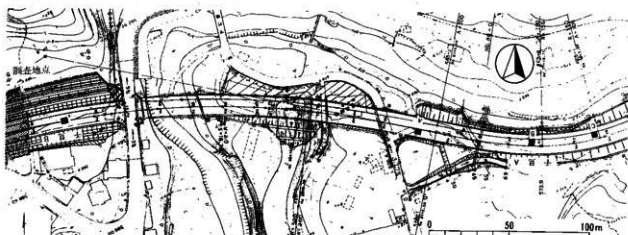
#### 3 調査の方法

基本的な調査方法は県埋文センター採用の方法に準ずる。測量基準線は道路杭に基づいて遺跡地内北西部の国家座標の区切れのよい数値をえらび出し、そこから第2・3図のようなグリッドを設定した。グ



第3図 グリッド設定とトレンチ配置 (S=1/400)

グリッドは大々地区 (200m四方)、大地区 (40m四方) を設定し、さらに大地区内部は中地区 (8m四方) と小地区 (2m四方) に分割している。標高の基準は、工事に設定された基準杭から遺跡内に移動した。平面図はこれらの基準線に基づいて、簡易遣り方により 1:20 を基本として中地区ごとの割付で作図し、各遺構の断面図も割付ごとにまとめた。また、地形測量は調査期間短縮のため空測を実施した。写真は基本的に 35mm と 50mm レンズによってモノクロとカラーリバーサルフィルムを使用し、必要に応じて 6×7 を使用した。遺跡全体についてはバルーンによる空撮を実施し、周辺を含めての写真はセスナを使用した。これらの写真のうち、セスナによる撮影ネガは空測業者が管理し、それ以外は所定アルバムに収納した。なお、建物の柱穴は調査時にSK番号をつけ、遺物もSK一括で取り上げている。



第4図 文化課試掘地点 (『リゾート等開発地域内の埋蔵文化財分布調査報告書』平成2年版、長野県教育委員会に加盟)

## 4 調査の経過

調査は7月6日より、重機による表土剥ぎと試掘トレンチセクション図の作成を行い、7月8日から作業員を加えて検出作業に入った。この作業により調査域東部では整地土の分布が認められたので、さらにトレンチを追加して下面の状況を検討した。その結果、整地上面を含めて4面の遺構面が確認され、順次掘り下げていくことになった。なお、整地土上面は一部表土剥ぎの際に削平してしまい、残存部で記録をとらざるをえなかった。また、縄文包含層は遺存状況の良好な南部を中心に遺物採取を行った。

以上の遺構精査がほぼ終了したところで、遺跡の地形形成解明を目的とした深さ約2mのトレンチを北壁際と中央に設定した。しかし、この中央トレンチでは、地表面下約1.3m下に焼土址が検出され、急きょ、周囲を約10m四方にわたって拡張した。しかし、他に遺構・遺物の検出が認められなかったため、この焼土址1基のみ精査して、8月7日に機材を撤収して調査を終了した。なお、8月1日には現地説明会を開催し、約70名の見学者があった。調査の進行状況は下の表1の通りである。

## 5 整理作業

整理作業は平成4年度と平成5年度にわたって断続的に実施した。まず、平成4年度は遺物の洗浄と注記、遺物の材質別分類、写真類の整理にあて、平成5年度は遺物の実測および遺構図面の整理と報告書の作成と諸資料類の収納を行った。



開始式



調査風景



美麻村小・中学校生徒見学

表1 調査進行状況

平成4年度				平成5年度						
7/6-7	/8		/13	/20	/27	8/1	/3	/7		
○重機掘削	○開始式・機材搬入	○検出作業開始	○整地トレンチ設定	○写真撮影 ○実測	○第一面空撮・空測	○検出・精査 ○整地掘削	○整地掘削	○重機掘削土層除去	○ダンプ押し・終了 ○北壁トレンチ設定 ○掘削上面・空撮・空測 ○検出・精査・実測	整理作業
					美麻小中見学		現地説明会			

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡地と伝承

調査地は江戸時代の善福寺伝承地であるが、詳しくは第4章で高附氏の研究を紹介し、ここでは簡単に述べておく。寺の成立年代は明らかでないが、17世紀中ごろの史料に現れるが、その後幕末に修験者が住み着くまで無住の状態が続いたとされる。そして明治時代には寺子屋として使用され、これが千見学校へ移行して廃寺となる。千見学校は『学校百年誌』によると明治6年に千見小学校として登録され、同20年には千見簡易小学校、25年には小学校令の施行で千見尋常小学校となり、30年に実質的な4年制となる。同32年には就学率の向上により教室と教員住宅を増設し、さらに同39年に2教室を追加するが、大正11年には廃校となっている。なお、『学校百年誌』には明治32年の開校式の写真と同30年の学校間取図が紹介されている(第5・6図)。

### 第2節 遺跡周辺の歴史的環境

ここでは周辺の地割・字名・伝承・石造物などの資料から遺跡の歴史的環境をみるが、各史資料の性格・内容の違いから個別に概観することにした。

#### 1 遺跡の分布

周辺の遺跡分布・遺跡地名は文化庁・長野県史・美麻村教育委員会の報告、小川村誌で触れられている。これらを参考に遺跡分布図(第7図)と同一覧(表2)・時代別集計(第9図)を作成した。遺跡数では縄文時代の中期が卓越し、その前後は少ない。これは縄文時代に限定すると県下で一般的にみられる傾向であるが、強いてこの地域特有の遺跡様相を挙げると大規模な集落がなく、石器のみ出土した遺跡がかなりある点といえよう。これらの縄文遺跡は山間部の平坦地と谷間の河岸段丘に立地し、周辺では山間部にある筏遺跡が発掘されている。次の弥生・古墳・奈良時代とも遺跡数は少なく、弥生時代では太型蛤刃石斧のみ採取された遺跡もある。平安時代は比較的多いが、小規模な遺跡ばかりである。中世は城館と僅かな戸隠信仰遺跡、墓、塚といった信仰遺跡があり、居住遺跡はほとんど知られていない。近世では寺院跡がいくつかある(第8回)。

#### 2 現景観と遺跡周辺の伝承・史跡

##### (1) 現景観



千見学校間取図(明治30年代) 平林恒樹氏による



式典の模様  
往時の千見学校  
〔『学校百年誌』より〕

近年、千見東方に住宅地が作られ景観の変化が著しいが、かつては本村地籍に屋敷地がまとまり、他は谷内に散在する景観であったようである。この本村地籍は土尻川の蛇行によりV字状に削り残された3つの段丘面から構成され、下から2段目に現県道が走り、この県道周辺と下の段丘に屋敷地が集中している。この屋敷地群を取り巻いて土尻川対岸と集落上段に畑地、その外に山林が広がり、墓地は山林と畑の接点に造られている。以上の景観を模式化して示すと第10図のようになる。次に道と屋敷地群、耕地、墓域を少し細かくみることにする。

A 屋敷地群と道

本村の屋敷地はV字状に残された河岸段丘に比較のまとまっている。な

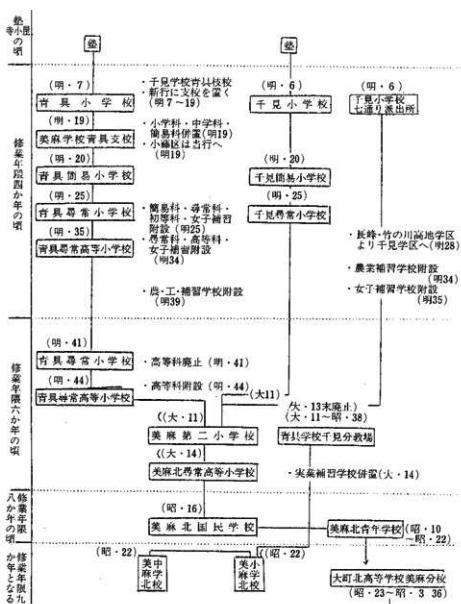
かでも県道と旧千見坂の道が結節する場所には関所役人と伝えられるa家、道を隔てたところに千見庄屋と伝えられるb家があり、この付近が千見の中心であったと推定される。この中心地を通過する県道の前身には「土尻川通り大町道」と呼ばれる大町・白馬と善光寺平をつなぐ古い谷道があり、『文政4年 安曇郡小谷通り上田送荷物書上』、『天保5年安曇郡千国経由上田行北国荷物につき何書』などの文書に見るように、この道は白馬から新町、上田へ抜ける経路にもなっていた。また、この県道と尾根道の「大町峠街道」をつなぐ「千見坂の道」は現在廃道となっている。

B 畑地域

如は屋敷地内にもあるが、屋敷地群周囲に比較的まとまっている。その多くは整地を伴わず、斜面をそのまま使うものである。水田は千見本村東部に見られるが、比較的新しい時期に作られたという。

C 墓地 (第11図)

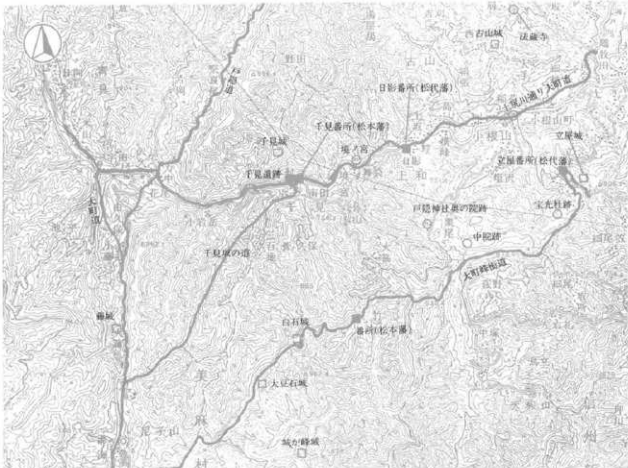
墓地は基本的に家単位のものが畑地と山の境に散在し、本遺跡周辺では背後の畑にC1、山の斜面にはC2がある。C1は暮末に善福寺へ移り住んだc家の墓と庄屋であったb家、関係が明らかでないd家の墓があり、周囲には砂岩製で銘文も読めない石塔が多数倒れている。C1で判読できた紀年名は文化、文



第6図 千見学校の変遷 (『開校百年誌』1973麻森村北小中学校より)



第7図 周辺の遺跡分布 (1:100,000) (国土地理院発行5万分の一地形図縮小使用)(地名参照)



第8図 遺跡周辺の史跡 (国土地理院発行5万分の一地形図に景教委「歴史道調査報告XV」1985を参照加筆。)

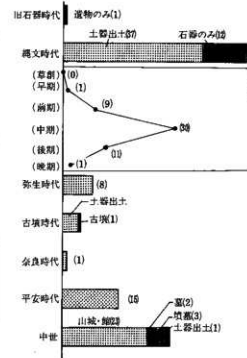
表2 周辺の遺跡一覧

遺跡名	時期・備考	文献
1 鏡平	縄後 (散石?)	4
2 久保田(米山)	縄 (伝古茅出土)	1, 3, 4
3 翁の入	?	4
4 前平	縄前	4
5 すみの木	縄後	4
6 さけの沢	縄後、平	4
7 千本塚1	文献1, 3は古墳, 4は信仰塚	1, 3, 4
8 千本塚2	同上	1, 3, 4
9 千本塚3	同上	1, 3, 4
10 日向林	縄前 (伝伊集出)	1, 2, 3, 4
11 宮平	縄前~後 (発掘)	2, 3, 5
12 茅女	縄 (石斧採取)	3, 5
13 唐松	縄中	1, 2, 3, 5
14 茶野	縄前~中, 平	1, 2, 3, 5
15 浅	縄中~後, 弥, 平 (発掘)	1, 2, 3, 5, 10
16 文屋	縄 (石斧採取)	1, 2, 3, 6
17 麻平久保	縄前~中	2, 3, 5
18 松木原	縄	5
19 飯久保	縄中 (石斧採取)	1, 2, 3, 5
20 上屋	縄中, 平 (石斧採取)	1, 3, 6
21 西光寺跡		10
22 坂ノ瀬神田		10
23 丸坂		10
24 高府宮西沖	縄中, 弥, 平?	6, 10
25 越越巻場		10
26 藤平		10
27 窪古		10
28 萩の久保	縄	6, 10
29 萩の久保結塚		
30 見越の尾	縄, 弥	3, 6, 10
31 猪牧田	弥, 平	6, 10
32 月夜平	縄 (石斧採取)	6, 10
33 西沖		10
34 中島	縄中, 平	1, 2, 3, 6
35 安和	縄中	1, 2, 3, 6
36 成越	縄前~後, 弥	1, 2, 3, 6
37 下北尾	縄中	1, 2, 3, 6
38 駒越	縄中, 古	1, 2, 3, 6
39 柳地	古	1, 2, 3, 6
40 花尾	縄中	1, 2, 3, 6
41 不田	縄前	1
42 欠塚	縄, 平	1, 2, 3
43 青木	縄 (石斧採取)	1, 3
44 宮	縄中~後, 弥, 古, 平 (発掘)	1, 2, 3, 11
45 地崎	縄前~後	1, 2, 3
46 松ノ木	縄 (石斧採取)	1, 2, 3
47 石瀬	縄中	1, 2, 3
48 船渡	縄 (石斧採取)	1, 2, 3
49 城	縄中	1, 2, 3
50 下条	平	1, 2, 3
51 三ヶ野	縄中	1, 2, 3
52 茂田井	平	1, 2, 3
53 安用	縄中 (石斧採取)	1, 3, 5
54 後山	縄中	5
55 上条	縄前~後, 弥, 古, 平 (発掘)	1, 2, 3, 5, 12
56 安雲寺境内	中世高	3, 5
57 竹房宮家	縄中 (石斧採取)	1, 3, 5
58 武富佐古墳	古 (古墳~発掘)	1, 3, 5, 13
59 竹房大門	縄中, 古, 中	1, 3, 5
60 竹房公民館前	縄中, 平	3, 5
61 堀本坂頭	縄中	3, 5
62 お供平	旧, 縄前~後, 中 (発掘)	1, 3, 5, 14
63 教野島本町	縄 (石斧採取)	3, 5
64 南原	縄中, 弥	1, 2, 3, 5
65 下中牧	縄前~後	1, 3, 5
66 平	縄中	1, 3, 5
67 鹿道	縄中	1, 2, 3, 5
68 道地	弥, 平	3, 5
69 日名	縄中, 平	1, 2, 3, 5

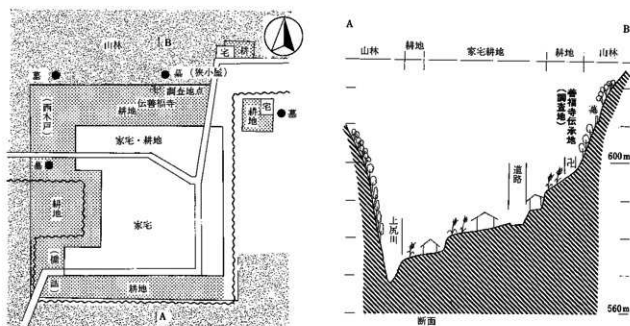
城跡名	時期・備考
70 藤城	4
71 二重城	4
72 二重南城	4
73 千賀城	4, 7, 8
74 白石城	4
75 大豆城	4
76 城が峯城	4
77 萩野城	3, 8
78 古山城	7, 8
79 立屋城	8
80 高谷城	8
81 北の城	3, 8
82 中山城	8
83 牧之島城	(発掘) 1, 3, 5, 7, 8, 15
84 牧城跡	3, 5, 7, 8
85 上条御原城	3, 5, 7, 8, 9
86 天童山城	3, 5, 8
87 菅宮城	3, 5, 8
88 中牧城	3, 5, 7, 8
89 高取城	8
90 拾録城	7
91 松原城	8

参考文献 (資料報告等は割愛した)

- 文化庁『全国遺跡地図 長野県』1983
- 信濃史料刊行会『信濃史料1巻』1956
- 長野県史刊行会『長野県史考古資料編1巻』1981
- 美麻村教育委員会『美麻村遺跡分布調査報告書』1991
- 信州新聞誌 1979
- 小川村誌 1975
- 『日本城郭辞典』新人物往来社 1980
- 長野県教育委員会『長野県の中世城館誌』1983
- 長野県教育委員会『長野県史地名勝天然記念物調査報告書』1948
- 小川村教育委員会『筏遺跡』1991
- 中条村教育委員会『宮遺跡』1993
- 信州新聞教育委員会『信州新聞上条遺跡緊急発掘調査情報』1976
- 信州新聞教育委員会『武富佐古墳』1969
- 信州新聞教育委員会『お供平』1982
- 信州新聞教育委員会『牧野島城』1966



第9図 表2の時代別遺跡数の集計



第10図 千見本村現象観のモデル

久、天保年間から昭和までである。C2は急斜面にいくつか平坦地を造り、そこに関所役人であったa家の墓が作られている。この石塔は砂岩製で紀年名の判読しづらいものも多いが、最も古いもので寛永10年銘が認められた。しかし、石塔の采譜や型式的比較が十分行えず子細は明らかでない。

以上より、千見本村は2つの道の結節部を核として屋敷地と屋敷畑が集合し、その周囲を耕地と山林が同心円状に取り巻く景観となる。さらに、山林と耕地の接点に墓城が点在することから、かつては民俗学が示したように精神的世界観も投影した同心円構造の村落景観で理解できる。このモデルにおける発掘地点の位置は他界へつながる周縁部に近い部分にあたり、伝承通り寺院があるとすれば周縁部と中心をつなぐ役割を担って、現景観の村落構造の成立と密接に関連して位置づいていた可能性がある。

## (2) 地籍図と字名

遺跡周辺の明治23年の地籍図と字名を第12図に示した。宅地、村構成、耕作、道に係わる地名が認められるが、宅地部分の字名と屋号は明らかにできなかった。

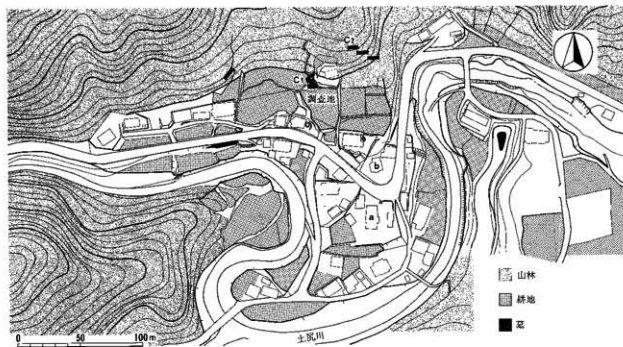
宅地関係では位置を示す「家の脇」、「家の下」、「屋敷前」、「家の前」、「家の浦」と屋敷地自体の「屋敷」(狭間小屋)がある。村構成では「西木戸」、「橋詰」、「狭小屋」、「上の山」があり、道関係では道との対比で位置を示す「道上」、「道下」と固有の道を示す「柳坂」がある。畑に係わる地名は「木締畑」、「裏麻芋(うらあそ)」がある。他には地形名の「幅下」、さらに「堀」という地名もあるがこれは地形を指すとも思われる。なお、遺跡調査地は学校と呼ばれるが、地籍図では北西の狭い部分に「善福寺」と記載されている。

以上の地字名は先にみた村落構造と合致し、集落の境を示すと思われる「西木戸」、「橋詰」、「狭小屋」が本村を通過する道上にあり、さらに道に関係する地名から旧道が判明することは興味深い。

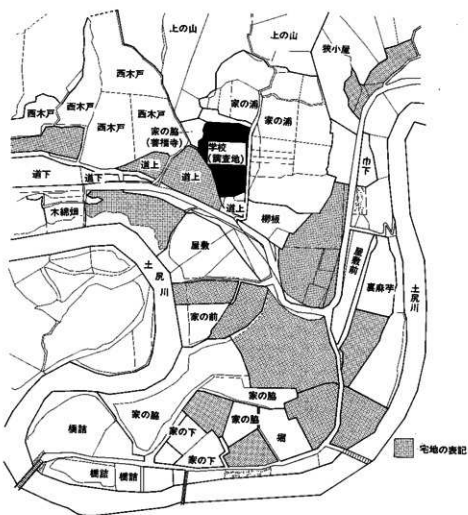
## (3) 千見城

千見城は遺跡背後の山頂部にあり、「長野県町村誌」、「日本城郭体系」、「長野県中世城館」、美麻村教育委員会による分布調査報告で触れられている。現在の城への登り口は遺跡近くと本村と青貝の中間の沢の2箇所にある。この千見城の文献記録については後ほど述べるが、16世紀中頃の武田氏支配時代に土豪大





第11図 千見本村地籍の現景観



第12図 千見本村地籍の字名

日向氏に関連して初出し、16世紀後半では小笠原氏と上杉氏の領国支配の「境目の城」として数多くの戦國期の記録がある。なお、千見には大日向氏一族の館があったとされるが事実関係は明らかでない。

#### (4) 番所

千見本村地籍には江戸時代に松本藩の番所が設置されていた。この千見番所の初見は寛永年間、松本藩のなかでも古くから存在する番所の一つとされる。土尻川通り大町道での設置場所は、遺跡の北東段丘下の現県道が本村手前で大きく折れる場所に比定され、この先で千見坂の道が分岐する。また、大町峠街道では立屋の松代藩の番所と相対して山中に伝承地がある。

### 3 まとめ

以上の歴史的環境よりみた千見地籍の歴史的な位置についてまとめておく。千見周辺では縄文時代の遺跡は知られているが、弥生・古墳時代の居住遺跡と認められるものはなく、続く平安時代は散在する小規模な遺跡が知られるのみである。つまり、弥生時代以後の米づくりから描かれる歴史の中ではこの地が周縁部におかれた場所となる。ところが中世には流通機構と社会内の分業の発展を背景に米作以外の産業を生活基盤とした独自の生活領域の形成・発展があったようである。そして戦国時代には小笠原・上杉両氏の支配領域拡大の接点となり、そのまま盆地の政治権力の支配機構に組み込まれて近世に藩境として継承される。遺跡周辺の村落形成の時期や様相は不明であるが、少なくとも現景観にみられる構造の成立にかかわって調査地に寺が作られた可能性がある。

## 第3節 遺跡周辺の地形と地質

### 1 地形概観

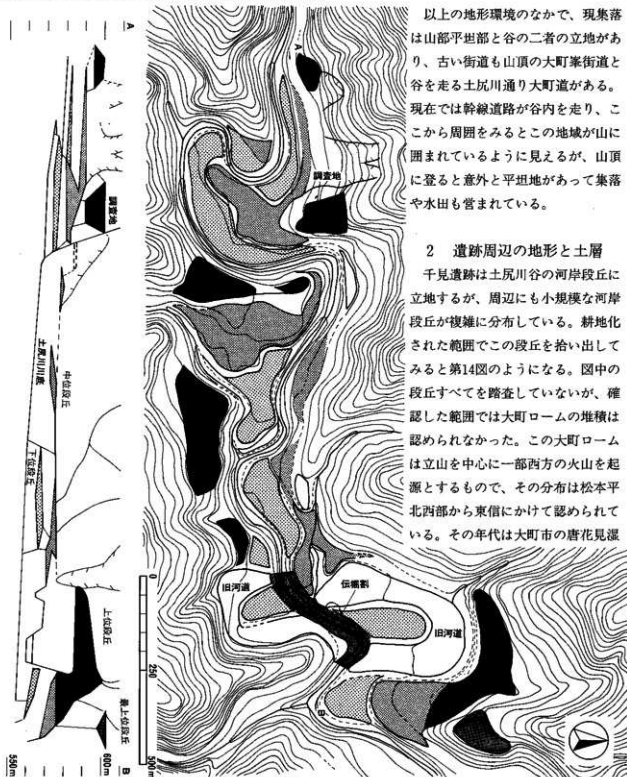
長野県は南北方向に長い山地と盆地が交互に並列し、県北西部では北アルプス東に陥没した松本盆地とその東辺に隆起した低い山地がならぶ。本遺跡は松本盆地東縁の山地内に所在するが、この山地は分水嶺が西側に偏って東側は緩やかに傾斜し、地形環境の上で山部と谷部に分離して捉えられる。山部は急傾斜地ばかりでなく、ローム層下位の河川礫層が認められる平坦地が発達し、それらは隆起以前の河川が形成したもので大峰面群と呼ばれている。谷部は東西に流れる中規模の河川と

時代	大山地形	南部地形	南部地質	大町テフラ	竜川段丘	大町段丘	備考
大正		押出面	はんらん原			赤土面	
昭和		上海積層		香花見現成層	第4段丘	大町面	2.7×10 <sup>4</sup> 3.6×10 <sup>4</sup> C <sup>14</sup> 年
新	P-V P-W	赤土面	針尾層	?	第3段丘	大町公園面	
世	P-III P-II P-I	旗田面	小野沢礫層	E-浮石層			
		小坂田面	?	D-#	第2段丘	上原面	
		小坂田層	?	C-#	第1段丘	なかやま面	
		城山層	城山層	B-#			
		大峯面		A-#			
		松伏山面					平坦化作用
		松伏山面					1.0×10 <sup>4</sup> K-Ar年 1.3×10 <sup>4</sup> 年
		松伏山面					遺跡の年代

小村国史による N, R は古地磁気正逆を示す

第13図 松本平第四紀編年表（『北安曇郡誌』1971より）

そこに流れ込む南北方向の小規模河川で構成され、その中規模河川の一つに土尻川がある。この川は狭い谷内一杯に蛇行して流れ、多くの河岸段丘を形成しているが、崩れやすい第3紀の堆積岩の山地にあって谷内には崖錐地形と河岸段丘が複雑に混在している。なお、この土尻川流域ではロームの有無やローム層準による段丘分類が行われていないが、下流の河岸段丘に立地する中条村宮遺跡では現河床との比高差が小さいながらもロームが認められ、かたや本遺跡では確認されないのど土尻川流域と下流域では隆起の度合などで段丘形成の様相が大きく異なる可能性がある。



以上の地形環境のなかで、現集落は山部平坦部と谷の二者の立地があり、古い街道も山頂の大町峯街道と谷を走る土尻川通り大町道がある。現在では幹線道路が谷内を走り、ここから周囲をみるとこの地域が山に囲まれているように見えるが、山頂に登ると意外と平坦地があって集落や水田も営まれている。

## 2 遺跡周辺の地形と土層

千見遺跡は土尻川谷の河岸段丘に立地するが、周辺にも小規模な河岸段丘が複雑に分布している。耕地化された範囲でこの段丘を拾い出してみると第14図のようになる。図中の段丘すべてを踏査していないが、確認した範囲では大町ロームの堆積は認められなかった。この大町ロームは立山を中心に一部西方の火山を起源とするもので、その分布は松本平北西部から東信にかけて認められている。その年代は大町市の唐花見湿

第14図 千見周辺の河岸段丘と土尻川左岸見通し (美麻村森林基本図使用 1 : 10,000)

原の泥炭がローム上になっていることより、終末は1万年前頃と考えられている(第13図)ので、土尻川上流域の段丘の形成時期もそれ以後と考えられる。このことは文化課の試掘や今回の発掘の結果からも確認され、千見の低位段丘では比較的新しい時期の遺跡が分布すると考えられる。なお、伝承にあるように近世・近代には土尻川の流路変更などの人為的地形改変も大きく行われたようである。

#### 参考文献

(第2章2節1に記載した以外の参考文献)

高附武男「善福寺の秘宝」『雑報 みあき101』1992 美麻村公民館

美府小中学校『学校百年史』1973

平林照雄「第1編 地形地質 東部山地」『北安曇郡誌 第1巻自然』1971 北安曇郡編纂委員会

## 第3章 発掘調査の結果

### 第1節 地形と土層

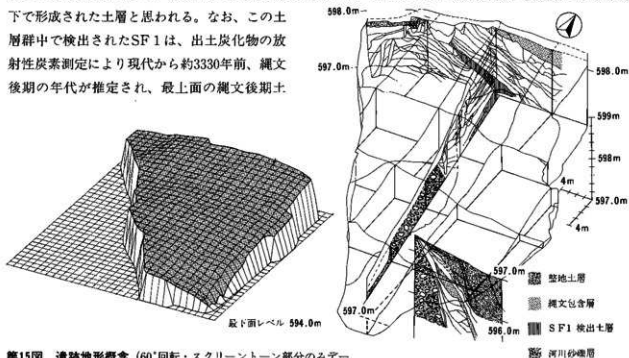
遺跡の立地する河岸段丘は山手から南へ緩やかに傾斜し、東西が段崖に区切られた舌状を呈する(第15図)。調査地の土層は旧土尻川の堆積土と山からの崩落土、人為的な整地土から構成され、土質と分布状況、堆積順序により3つのグループに分けられる。すなわち、堆積順に述べると南部に分布するa群河川砂礫層、b群山手に分布する粘土・細砂・シルトに砂岩片を含む土層の互層堆積層、c群黒褐色・暗褐色を基調とする土層・整地土層である(第16図)。a群中に人間の活動の痕跡はなく、b群中に焼土跡(SF1)が検出され、東部最上面に縄文後期土器包含層がある。さらに調査地西部では平安時代以後の遺構・遺物はa・b群上面に、c群は東部を中心に分布し、整地を含んで中世以後の検出面が複数ある。

#### a群 河川砂礫層

この層は調査地南部で水平に分布し、北側は現地形と逆に傾斜して上部にb群の土層をのせている。従って、かつて山手を流れる流路があったが、離水開始時期には本遺跡東側を北東に流れる流路へ変化していったと推定される。礫層を構成する円礫は砂・泥岩ほか、チャートや火山性の岩石が含まれる。なお、調査域北壁トレンチは砂礫層まで達していない。

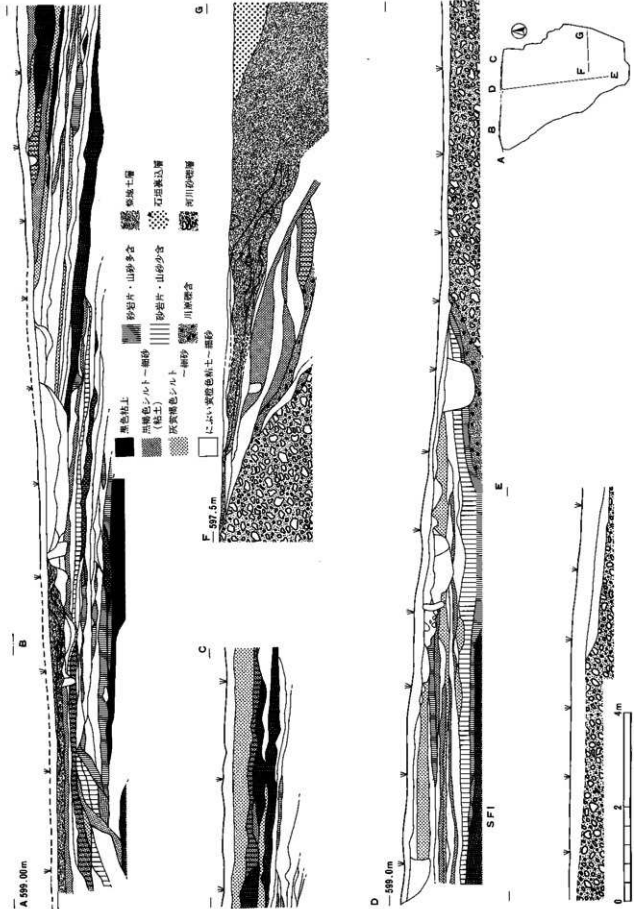
#### b群 シルト質土・粘土・細砂と砂岩片を含む土層、暗褐色土の互層堆積層

この土層群は調査地北側の河川砂礫層上部に分布し、北側が高い現地形の基礎をつくっている。層は全体的に北西から南東へ傾斜し、下部に粘土や粘質土層、その上部は灰色系のシルトや細砂が砂岩片を含む土層が交互に堆積する。さらに上部になると暗褐色土層が挟まれるようになり、最上面にc群へ連続する縄文土器包含層がのっている。本群の土質と堆積状況からすると河川内から離水開始、安定期に至る環境下で形成された土層と思われる。なお、この土層群中で検出されたSF1は、出土炭化物の放射性炭素測定により現代から約3330年前、縄文後期の年代が推定され、最上面の縄文後期土



第15図 遺跡地形概念 (60°回転・スクリーン部分のみデータあり)。

第16図 千見遺跡土層構成の模式



第17図 千見遺跡基本土層 (S=1/80)

器包含層の関連を考え合わせると、縄文後期にb群土層の堆積が著しく進んだ可能性が考えられる。

#### c群 黒褐色土、暗褐色土を基調とする堆積土と整地土層群

子細は次節で述べるが、段丘の離水後に形成された土層群で、段丘端から傾斜部にかけて分布する。土層の形成時期は縄文後期以後から近代の間と思われ、多くの遺構構築面がある。

## 第2節 検出された遺構と遺物

### 1 平安から近代の遺構と遺物

#### (1) 遺構検出土層と整地

この時期の遺構と遺物は基本土層b群以上で検出したが、c群土層が分布する段丘東傾斜域をはじめとして複数の検出面が認められた部分がある。以下にその部分について述べる。

##### ① 段丘東傾斜域 (第18図)

ここでは小規模な階段状テラスをつくる整地面が灰黄褐色土をはさんで2段階認められ、最上部に整地Ⅲが盛られている。従って、調査面は整地Ⅲ上面、整地下面、灰黄褐色土層下面、見逃しの遺構の確認と縄文後期土器包含層の調査を兼ねる合計4面となった。各調査面の概略と検出遺構は以下の通りである。

##### 1面：整地Ⅲ上面 (第19図-上左)

整地Ⅲは東傾斜域の最上部に位置し、さらに2つに細分される。一つはSD14付近を埋める部分的な整地Ⅲaで、もう一つは東南部の段丘崖を大規模に埋め立てる整地Ⅲbである。整地ⅢaはSDの項で子細に触れるが、褐色粘土を主体としてSD3・14を埋めている。従って、その形成時期は千見学校と推定されるST1に前後する時期と考えられる。また、整地Ⅲbは平坦部拡張を目的とし、分布範囲からST3に対応して形成された可能性があり、千見学校改築に伴うと考えられる。この整地Ⅲbは土質が基本土層b群と類似することから調査域北部の山麓から土を運び、図に示した数字順に数段階にわけて埋められたと思われる。整地上面の遺構はSKが2基ある。なお、整地土Ⅲは表土剥ぎの際北部上面を削り、残存部のみ記録をとった。

##### 2面：整地土下面 (第19図-上右)

この調査面は整地土Ⅲを除去し、大きく2段の平坦面を検出した。上段は緩斜面を削って形成されており、SD14・15・16、SA1とSK136が検出されている。これらの遺構の一部は整地土Ⅲaと並存している可能性があり、SA1と一括したピットの一部も検出したが灰黄褐色土の薄い部分で検出しているために本来の構築面が判然としないものがある。また、下段の北側に段丘面へ登る遺跡と思われるSD18が検出されている。以上の状況と遺物との関係から、この面は江戸時代末期から千見学校前半期までを含んでいる可能性がある。

##### 3面：灰黄褐色土下面 (第19図-下左)

3面目では上記2面目の調査面南半分に分布する灰黄褐色土を除去し、新たに2段の平坦地を検出した。先に検出した平坦地を含めると3面の平坦地から構成されることになり、中段で上記SA1延長上のピット群、下段では溝状を呈する不整形な落込みを検出している。褐色土中からこの3面までに出土した遺物は平安時代の内黒杯、須恵器長頸壺から白磁V類、中世後半期の内耳鍋、土器皿(かわらけ)、江戸時代の陶磁器があり、少なくとも18世紀にはこの平坦地が埋められたと考えられる。

##### 4面：最終確認面 (第19図-下右)

縄文土器包含層を手掘りで除去して露呈し、上記中・下段にあたる部分でSA2としたピット群を検出した。SA2は3面では検出されなかったが、第5トレンチではSA2の一部と思われるピットが縄文包含

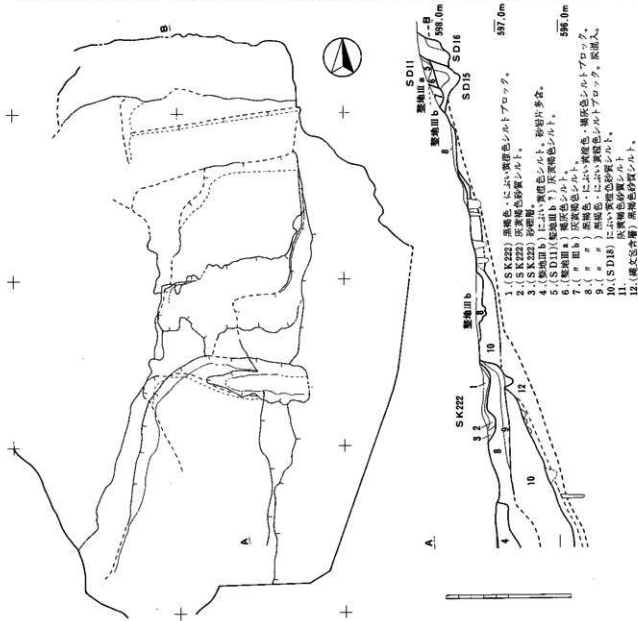
層上部から掘り込まれていることが確認されたことにより、縄文土器包含層としたなかに見逃した土層が一枚存在した可能性がある。

### ② 北西部

段丘北西端ではSD13→SX1→SH2が順次作られ、上部にはこれらを覆う整地Ⅰが認められた。調査当初の混乱で整地Ⅰ以外のSD13、SX1、SH2の遺物は一括して取り上げ、一部整地土の遺物も混入してしまっているが、整地Ⅰが近代、SH2以下は江戸時代末期を主体とする遺物を出土している。SD13がST7のビットを切ることで整地上面にST2が構築されていることを考え合わせると、整地Ⅰは近代の千見学校構築に伴うもので、ST1=2とST3の関連から整地Ⅲbに先行すると推定される。また、SD13→SX1→SH2はそれに先立つST5～7前後に構築された可能性がある。

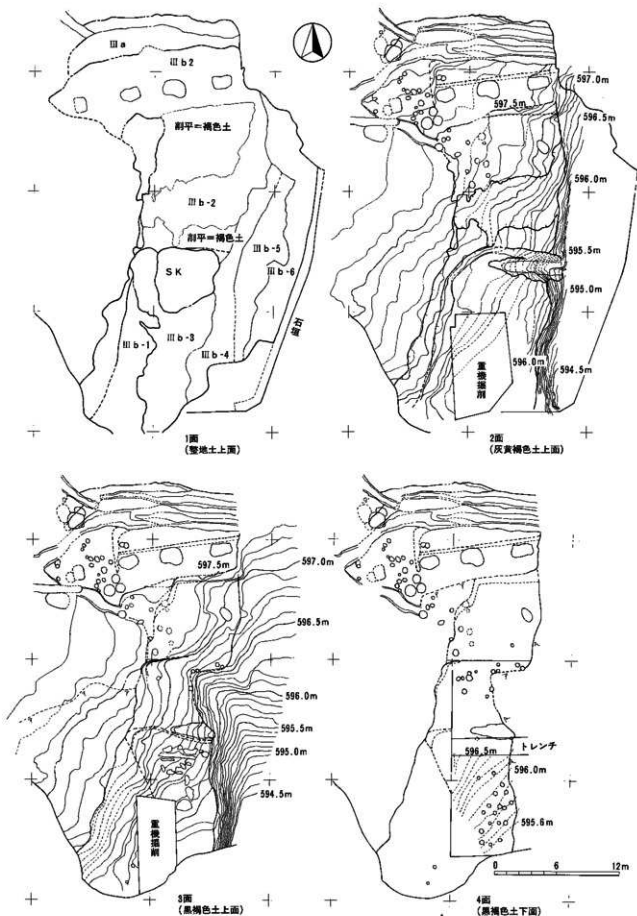
### ③ 中央西部

中央西部のST5～7とSD10に挟まれた範囲では、緩斜面を段切りしたテラスとそれを埋める整地Ⅱが検出された。整地東南部は徐々に薄くなってSD14付近で消えており、SD14との関連や整地の東南端部の範囲は明らかにできなかった。他の遺構との関連は整地上面でSK17・33・63、整地下でSK64・128・129・

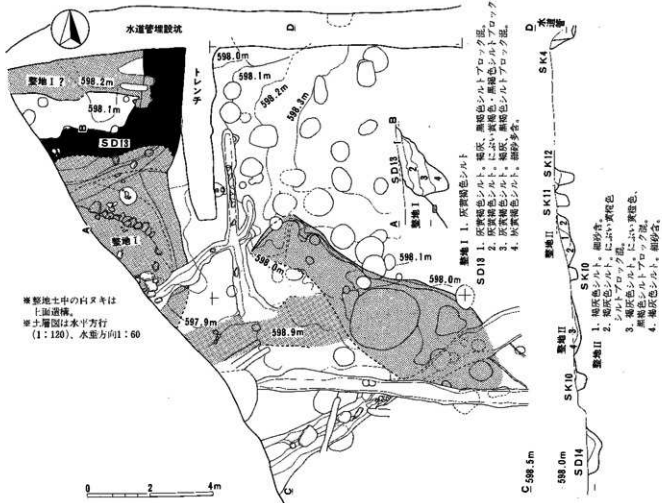


第18図 段丘東傾斜域のテラス重複状況と土層 (S=1/480、断面の標高のみ1/40)





第19図 段丘東横斜坡の各調査面 (1:360)



第20図 整地 I・II 分布範囲 (1:120)

130・131・134・176が検出された。この整地下の平坦地の方向と上面のST2・3推定範囲が覆うことにより、ST2・3構築以前であることは間違いない。

## (2) 遺構 (第54図)

### ① 建物跡

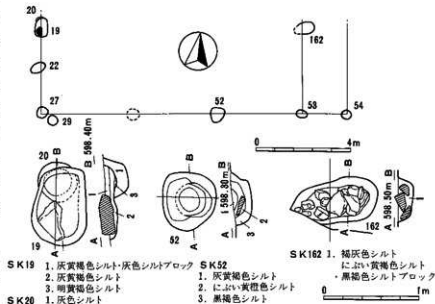
建物は礎石建物と掘立柱建物がある。前者では僅かに残る礎石とその痕跡と思われる穴跡の配置を検討して建物の認定をしたが、礎石が残らぬ場合は掘り込みが浅いこともあって見逃している柱跡も多いと思われる。また、掘立柱建物では調査時に検出したピットに個別SK番号をつけて精査し、整理時に建物として認定したものが多く、記録の取り方が十分でないものがある。また、堅穴建物、あるいは建物内施設の可能性のあるSK4は土坑の項で扱った。

#### A 礎石建物跡

##### ST1 (第21・55図、PL4)

調査城北東部の最も高い部分に位置し、縄文後期包含層を含む基本土層b群上面で検出された。柱穴跡は一部が試掘坑と水道管埋設坑で削平されるものの全部で8基検出され、建物は調査域外へ延びている可能性があるが、東へ半間のびる1(約3.4m)×3.5(約12.8m)間の長方形の総柱建物と認められた。主軸方向はN-83°-Wである。柱跡は約3.6m間隔に配置され、東端部では半間約1.8mを測る。柱穴の構

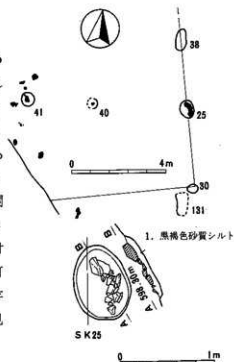
遺は浅い落込みを掘削して少し土をいれ、さらに粘性の強い粘土でつき固めて礎石を設置している。この様相が典型的に認められるのはSK19であり、礎石は残存していなかったものの、SK52は類似した柱穴構造をもつ。周囲の遺構との関係ではST7の柱穴跡としたSK21を切ることからST5~7、及び近似時期に存在したと思われるSD3・14の遺構群より新しく、ST2、整地II・III aと並存し、ST3と整地III bの遺構群に先行すると考えられる。出土遺物はないが、整地III aと本址、整地Iを切るST2との関連から近代の千見学校校舎と推定される。



第21図 ST1 (上は1/160、1/40) (数字はSK番号)

**ST 2** (第22・55図)

調査城北西部のST1西側に位置し、整地I上面から基本土層b群上面にかけて検出されたSKと礫分布から整理時に建物と認定した。従って、柱配置や規模・切り合いに関しては不明な点を残す。建物は調査域外へ延びているが、確認できる範囲で2間(約6.6m)×2間(約6.6m)の方形プランを呈し、棟方向はN-9°-Wである。切り合いは整地Iを切るが、整地IIとの関係は明らかでない。本跡の柱穴跡は6基あり、南西隅から西側にかけて散在する礫も関連すると思われる。柱穴跡は浅いくぼみに小礫を敷いたものが3基、浅い落ち込みとして認められたのみが3基ある。また、この付近では試掘の際に平石が2個検出されているが、本建物の礎石の可能性もある。周囲の遺構関係では軸方向と位置からST1と並存し、ST5~7に後出し、ST3に先行すると推定され、近代の千見学校関連の建物と思われる。

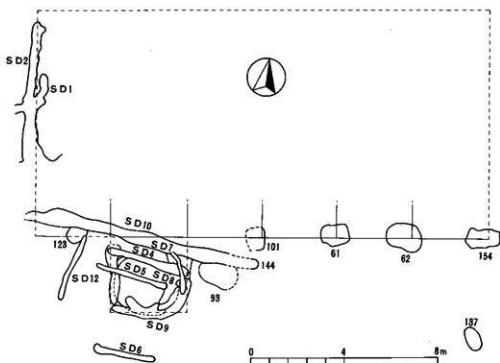


第22図 ST2 (数字はSK番号)  
(上:S=1/160、下=1/40)

**ST 3** (第23・55、PL5)

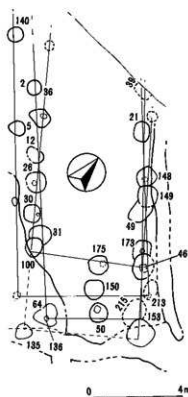
整理段階で認定し、類似した形状のSK61・62・101・154を直線で結ぶラインを基軸として、その延長に集中するSD4~10・12、そのラインに直交するSD2から構成されると捉えた。基軸となるSKの並列ラインはN-82°-Eで、これらの遺構部の分布範囲をSKの間隔で割ると6間(約19.2m)×3間(約9.6m)の長方形建物が推測される。しかし、SD10・12は上記の主軸方向とずれをもち、さらにSD10に近接して並列するSK93と123、さらに延長に位置するSK138を考えると、別の主軸方位をもつ建物が建替された可能性もある。切り合いはSD1・14・17、SK66・68・70~72・75・84・91・93・97・123・125・146、ST8 (SK179)、ST9 (SK96・124・126・177・178)を切る。上部を削平したため整地IIIとの関連は判然とし

ないが、建物がかなり東部の傾斜地へ迫り出しているので近接した時期に構築され、両者は密接な関係があったと思われる。柱穴跡と推定したSK61・62・101・154は約1.5～1.9m間隔に位置し、深さはSK101が検出面から約35cm、ほかは約70～100cm前後を測る。



第23図 ST 3 (数字のみはSK) (S=1/160)

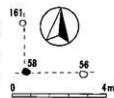
埋土は拳大から人頭大までの礫がぎっしり詰め込まれており、柱下部の基礎ではないと思われる。また、SD2は建物西端に位置する土管が埋設された溝であり、SD4～9・12は建物の入口施設と思われる。本跡は規模と整地Ⅲ出土遺物より近代の千見学校建物跡と推定される。



第25図 ST 5～7 (数字はSK番号) (S=1/160)

#### ST 4 (第24・55図)

調査域の北東部、ST 1に重なる場所にある。礎石と思われる平石と周囲にあるやや不定形な落ち込みの配置を検討し整理段階で建物跡と認定したが、建物の構造・規模など不明な点を残す。遺構の直接的な切り合いは認められなかったが、位置的にST 1との同時存在は考えられない。認定した規模は柱間約2.4mで主軸方向はN-5°-Wを示す。また、礎石は下部に造作が認められず、礎石のみである。本跡の時期や性格は明らかでないが、礎石下部の構造が他の建物より簡単であること、江戸時代の遺物を出土したSD16に区画された場所に立地することから、礎石建物のなかでも最も古い段階に位置づくのではないと思われる。

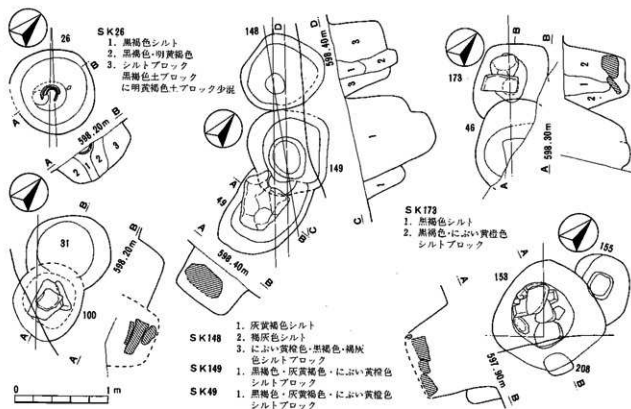


第24図 ST 4 (数字はSK番号) (S=1/160)

#### B 掘立柱建物跡

##### ST 5-7 (第25・26・56図、PL 7)

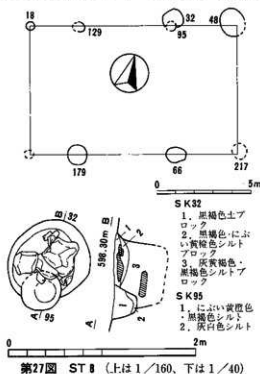
調査域北西部に位置し、重なって検出されたほぼ類似した構造・規模の建物を整理段階で再検討して個別の建物を認定した。基本土層b群上面で検出し、一部の柱穴は2本の試掘坑と現在の水道管理施設で削平されている。切り合いはST 5がST 7・8、SK155・208を切って、SD 3・14、



第26図 ST5-7の柱穴 (S=1/40) (数字はSK番号)

整地土IIに切られる。ST6はSD3、ST7はST1 (SK19)・整地土II、SD3・13、SK134に切られている。これらの建物の北西部は調査域外へ延びており、全体像は明らかでないが、何れも長方形の側柱建物であり、柱の通りは良くない。

ST5は南東方向にSK135・153を含んで延びる可能性があり、その場合、2間(約4.8m)×4間(約10.8m)以上で主軸方向はN-36°-Wである。柱間寸法は桁東端でやや長く約3.6mであるが、他は約2.6m前後である。ST6は2間(約4.0m)×3間(約9.6m)以上で主軸方向はN-43°-W、柱間寸法は約3.6mである。



第27図 ST8 (上は1/160, 下は1/40)

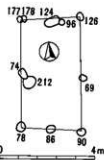
ST7は2間(約5.6m)×3間(約11m)以上で主軸方向はN-42°-W、柱間寸法はばらつくが、最大約4.0mを測る。個々の柱穴は円形か楕円の平面形を呈し、直径は最大でSK153の約1.1m、最小SK128の約0.4m、平均では0.8~1.0mを測る。検出面からの深さは最大で約1.0mで浅く、約0.3mで0.4~0.5m前後が多い。また、柱穴内に柱痕を残す例も多く、石を入れる柱穴もいくつか認められた。石の入り方は大きめの石が一つ入る場合と平石を積み重ねる二種があるが、規則性は認められない。従って、これらの石は柱の沈降を防ぐとともに柱の寸法を合わせる意味があったとも思われる。

時期は出土遺物から江戸時代末から近代初頭頃と思われ、ST1に先行することか

ら千見学校以前の寺小屋か、幕末に移り住んだとされる石山某の住居である可能性が  
ある。

**ST 8** (第27・57図)

調査域西部に位置し、基本土層のb群上面で検出した。切り合いはSK32を切り、ST1～3、5～7、SD14に切れ、東側梁行は試掘トレンチで削平される。確認された規模は梁行1間(約5.4m)×桁行3間(約8.8m)の長方形を呈し、梁行が長すぎるので本来は2間である可能性が高い。主軸方向はN-73°-Eである。柱間寸法は桁行で西から約2.0、4.0、2.8mとなり、やや中間の柱間が長くなっている。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は最大のSK48で約1.2m、小さなSK18で約0.4mを測る。深さはSK48で検出面から約1mを測るが、他は約0.4m前後である。また、内部に石を入れるものも認められている。出土遺物は僅かながら内耳鍋が出土し、これにより本址は中世末期に位置する可能性がある。



第28図 ST 9  
(数字はSK番号)  
(S=1/160)

**ST 9** (第28・57図)

調査域西部、ST8南側に位置し、切り合いではSD10に切られる。本址は建て替えられている可能性があり、建物として組めなかったが周りに散在する柱穴も類似した建物になると考えられる。規模は桁行2間(約4.8m)×梁行2間(約2.5m)で、主軸方向はN-5°-Wの長方形側柱の小規模な建物と思われる。柱穴は円形で、直径約0.4m、深さは検出面から0.3～0.5m前後を測る。本建物は繰り返して建て直されていることや、規模が小さいことから倉庫に類する小屋であると思われる。時期については明らかにできなかった。

② 櫓列跡

**SA 1** (第54図、PL7)

調査域北部から段丘東端部の傾斜地にかけて、N-42°-Wの方向で長さ約12mに帯状に並んだ柱穴をまとめた。西端の検出面は基本土層b群上面であり、段丘東端部では土層の薄い部分で検出したため灰黄褐色土層上部か縄文包含層上面に位置づくのか不明瞭である。なお、東端に縄文包含層上面で検出した東西方向に並ぶピット群があるが、検出面からの深さが異なり、問題を残す。切り合いでは上面を整地IIIbに覆われる。柱穴は円形で、規模はかなりバラツキがあり、最大で約0.8m、最小で0.2mである。出土遺物はなく、検出面も問題を残すが、灰黄褐色土層上面に位置すると江戸時代末期から近代初頭と思われるが、SA2との関連や、東端の柱穴の深さを考えると中世末期の可能性もある。性格は段丘平坦部を区画する櫓と思われる。

**SA 2** (第54図、PL4)

調査域南端の東傾斜地の4面で検出し、かなりの幅をもって並列するピットをまとめたものである。一部は重機で下げる際に削平しているが、「く」の字状に段丘崖先端を巡るものが、何回か建て直されていると思われる。また、SA1東端で検出された柱穴も関連する可能性がある。「く」の字状に折れる櫓とした場合、北側は主軸方向がN-38°-Wで規模は約6m、南側はN-51°-Eで約8mとなる。柱穴は円形で直径約0.3m前後を測る。出土遺物は縄文後期初頭の土器が若干採取されたが、縄文包含層の上部から掘り込まれていることと、上面の3面の遺物との比較により中世末に所属する可能性が高く、段丘南端の区画を意識した櫓と思われる。

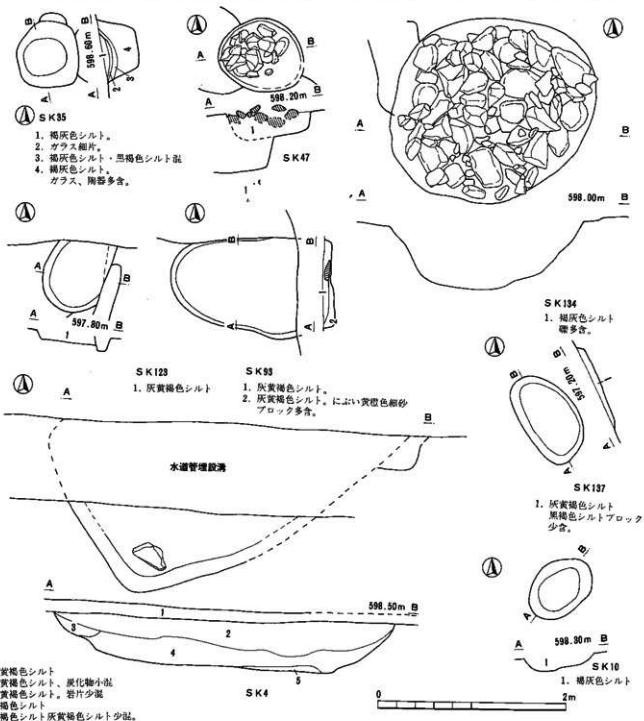
③ 土坑

**SK35** (第29図)

調査域中央やや西よりのところにあり、基本土層b群上面で検出した。切り合いはSK150・182を本址が切っている。平面は方形にちかい円形で、1辺約70cm、断面は箱型で深さは検出面から約35cmを測る。埋土中にガラスのみで1層を形成し、陶磁器片も大量に出土しているので近代のゴミ捨て穴と思われる。

**SK47** (第29図)

SK35の東に位置し、基本土層b群上面で検出した。切り合いはSK150と50を切っている。平面は約90



第29図 SK4・10・35・47・93・123・134・137 (1:40)

×80cmの円形で、断面は箱型で深さ約20cmを測る。埋土中には拳大の河原石を大量に含んでいる。出土遺物はないが、切り合いから近代に所属すると推定され、川原礫を多く含む点でSK134やSK1101・61・62・154に類似する。しかし、それらのSKとの関係は明らかにできなかった。

#### SK134 (第29図)

調査城西側の整地II下面で検出した。SK131と切り合いになるが、その関係については明らかでない。平面は216×198cmの円形を呈し、断面は深さ約82cmのU字状である。埋土中には拳大から人頭大の川原石が底部まで詰め込まれていた。時期は出土遺物と整地IIとの関係から近代に所属すると思われるが、性格は不明である。

#### SK123 (第29図)

調査城西側のSD10南側に位置し、基本土層b群上面で検出した。切り合いはSD10に切られ、SD12に接してSD14をわずかに切っている。平面形は残存部で80×68cm、断面は深さ約10cmのたらい状を呈している。性格は明らかでないが、同形態であるSK93と類似してSD10南側に位置していることから、ST3建て直しに係わる遺構と推定される。遺物は出土していないが、切り合いから近代の所産と思われる。

#### SK93 (第29図)

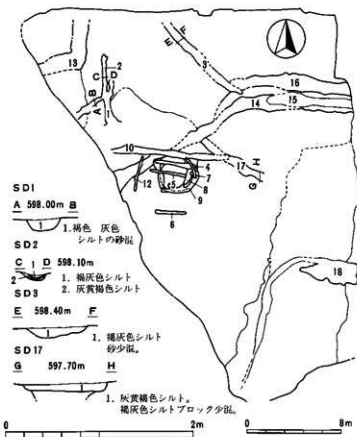
調査域中央西よりのSD10南側に位置し、基本土層b群上面で検出した。切り合いはSD10に接し、東半分は試掘溝で破壊される。残存部で132×108cmを測り、平面は楕円形と思われる。断面は深さ約10cmのたらい状を呈している。性格は明らかでないが、形態の類似したSK123とともにSD10南に接していることからST3に係わる遺構とも推定される。遺物は出土していないが、SK123との類似から近代の所産と推定する。

#### SK137 (第29図)

段丘東端部に位置する。切り合いはなく、上面の整地を削平して検出したので整地III bとの関連は明らかでない。平面は100×60cmの楕円形で、断面は約10cmのたらい状である。性格は明らかでないが、形状の類似するSK93とSK123とともに、SD10の延長南側に位置しているのでST3に係わる可能性がある。遺物は出土していないが、SK93・123との類似から近代の所産であると思われる。

#### SK10 (第29図)

調査域北西部に位置し、基本土層b群上面で検出した。切り合いはない。平面は約76×56cmの楕円形で、断面は深さ約9cm前



第30図 SD配置 (1:320)、SD1~3・17断面 (1:40)



後の浅いタライ状である。出土遺物は寛永通宝1枚で、近世の所産と思われるが、性格は明らかにしえなかった。

**SK 4** (第29図、PL 4)

調査城北壁にかかって基本土層 b 群上面で検出した。現代の水道管埋設坑でかなりの部分を破壊され、ST 7 (SK39) を切り、SD 3 に切られている。平面は確認部分から長軸N-61°-Eの長方形を呈し、一边は3.4m以上と思われる。壁はやや斜めに立ち上がり、約56cmを測る。底面は平坦であるが、あまり堅くない。埋土は数層に分けられ、なかに人頭大の礫が若干含まれている。遺物は近世末の陶磁器が少量出土したのみである。規模と形態からすると竪穴建物か、ST 5~7内部の施設である可能性があり、その時期は近世末から近代初頭の所産と思われる。

④ 溝 跡

**SD 1** (第30図、PL 8)

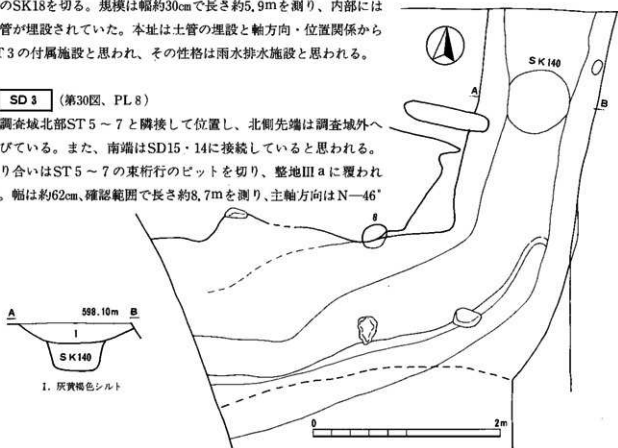
調査城西部の基本土層 b 群上面で検出した。整地IIの西脇からはじまりN-53°-Eの方向で段丘崖まで延びる。幅30~70cm、確認範囲で約4.9mの長さを測る。切り合いでSD 2に切られ、整地Iを切る。ST 2との関連は明らかでなく、SH 1は本址の段丘端部の施設と思われる。時期は整地土I上面に構築されていることから近代であり、その性格は排水路と思われる。

**SD 2** (第30図、PL 8)

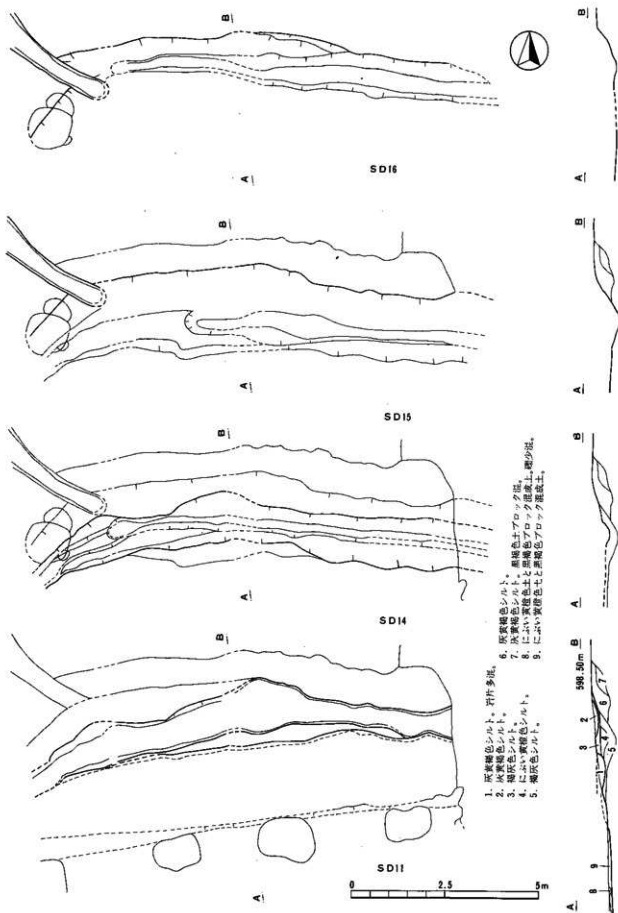
調査城西部に位置し、N-6°-Wの方向に延びて右端は広がって消滅している。切り合いは本址がST 8のSK18を切る。規模は幅約30cmで長さ約5.9mを測り、内部には土管が埋設されていた。本址は土管の埋設と軸方向・位置関係からST 3の付属施設と思われ、その性格は雨水排水施設と思われる。

**SD 3** (第30図、PL 8)

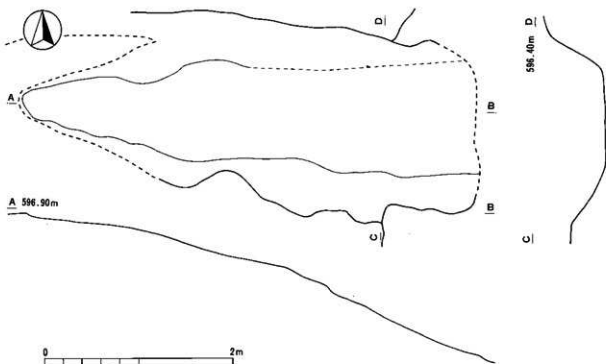
調査城北部ST 5~7と隣接して位置し、北側先端は調査城外へ伸びている。また、南端はSD15・14に接続していると思われる。切り合いはST 5~7の東桁行のピットを切り、整地III aに覆われる。幅は約62cm、確認範囲で長さ約8.7mを測り、主軸方向はN-46°



第32図 SD13 (S=1/40)



第31図 SD11・14～16の変遷 (1:100)



第33図 SD18 (S=1/40)

—Wである。本跡はST5～7の高台脇臨にあり、建物に雨水が入り込むことを防ぐための溝と思われる。

**SD10** (第30図)

調査域西部に位置し、ST3に係わると思われる溝である。主軸方向はN-83°—Wで段丘西端部から調査域中央まで検出され、幅は約71m、長さは約10mである。切り合いはST5 (SK66)、ST9 (SK177-178-96・124・126)、SD14・17、SK123・146、ST3入口施設と思われるSD8・9を切っている。ST3の軸方向と若干異なるが、ST3入口施設と思われるSD群が本址を北限として接している関連より、ST3の建て替えに伴うか、ST3廃絶直後に構築された可能性がある。

**SD17** (第30図)

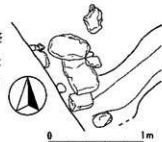
調査域中央に位置する。SD14交差点部分を西端とし、段丘東端部の傾斜地へかかる部分まで確認された。幅は約90cm、確認できる範囲で長さ約6.2mを測り、軸方向はN-50°—Wである。全体的に残存状況は悪く、深さは3～5cmを測る。切り合いはSK141～143端部を切り、SD14との関連は不明である。時期は走行方向からSD14と前後する時期か、近接した時期に存在した可能性があり、性格は排水と区画を兼ねる溝と思われる。

**SD13** (第32図、PL4)

調査域北西端の段丘崖にかかる場所に位置する。西端は調査域外へ延び、北端は現水道管理設坑で破壊されているが、残存部は「く」の字状の平面で、幅は西端で2.3m、北端で1.3m、長さは約7.4mを検出した。底面は段丘下から徐々に上がり、南側に浅い溝が確認された。切り合いはST7 (SK140)を切り、SX1、SH2に切られ、整地Iが上面を被っている。以上よりST7以後から近代の千見学校校舎がつくられる間に存在した道跡と考えられる。

## SD18 (第33図)

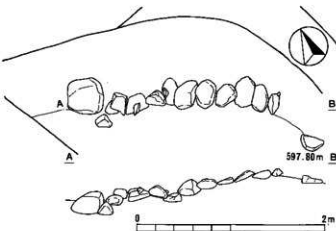
段丘傾斜地の整地下で検出し、2つの平坦地の境部分にある。調査では整地III bの土層観察用ベルトを上部に設定したため、整地下で範囲を確認した後、灰黄褐色土除去時に下部を調査した。本溝は底面が斜めであることや、2つの平坦地の間に設定されていることから段丘上がるための道と思われる。



第34図 SH 1 (S=1/40)

## SD11、SD14—18 (第31図、PL 8)

調査城北東の整地III北端に位置する。これらのSDは重複しているものの、位置や走行方向、規模を若干異にしているのでSD11・14~16に分離して捉えた。このうちSD16が最も古く、傾斜地の削平と区画を兼ねて東西方向に構築されている。切り合いではSD15に切られ、SD3との関係は不明だが位置的にはSD3に先行すると思われる。SD15はSD16南に並列し、位置や規模も類似するが、西端はSD3と接続していた可能性がある。SD15・16ともに調査城北部中央から始まり、東端は現在の道まで確認された。SD14はSD15上面に構築されており、SD3との接続部分が南西へ屈曲し、先端は西段丘崖へ達する。このSD14はST5(SK153)、ST8(SK179)、SK67・132・135・208を切り、整地II・III、SD10・12に切られているが、SD17との関係は明らかでない。本溝は雨水排水と区画を兼ねる溝であろう。SD11は整地III a上面で検出された浅い溝で、平面も不整形である。従って、土層の相違とその平面形から溝と捉えたが、実際には整地III aの窪地にいた整地III b土の可能性もある。

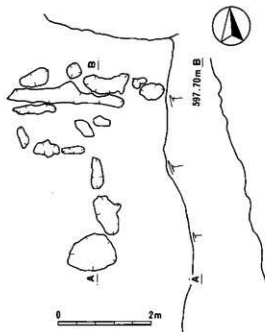


第35図 SH 2 (S=1/40)

## ④ 集石遺構

## SH 1 (第34図)

整地I南部、SD1先端に位置する砂岩の平石を使った石組である。調査域外へのびるので全容は不明であるが、SD1の端部に施された段丘崖接続部保護のための石組と思われる、その時期はSD1と同じである。



第36図 SX 2 (S=1/80)

## SH 2 (第35図、PL 8)

整地I下面で検出した石列である。切り合いでは、整地Iに埋められている。砂岩を中心とした近在で採れる石を一段ないし二段に並べ、SX1を埋めた後にその下部を保護する意味で入れられたものかもしれない。時期はSD13に後出し、千見学校が構築されるまでの間であると推定される。

### ⑧ その他の遺構

#### SX1 (第54図)

調査域北西部のSH2東に位置する。段丘傾斜地を削平した平坦地で、本趾が埋められた後に、西端部にSH2が構築されている。出土遺物はSH2・SD13と一括したが、ほぼ江戸時代末期から近代初頭に所属すると思われる。性格は不明である。

#### SX2 (第36・54図、PL3)

東南段丘傾斜部の3面目、褐色土層を除去して検出された不整形な浅い溝や円形の落ち込みの並列である。各落ち込みは浅く、明褐色の粘性の強い土が充填されていた。配列には規則性が認められるので人為的な所産と思われるが、耕作に関連するものなのか、あるいは何かの痕跡であるのか不明である。時期は褐色土層の出土遺物より近世後半と思われる。

### (3) 遺物

#### ① 焼物 (第37～40図、PL10～16)

本遺跡では江戸時代後半から近代の焼物が主体を占め、他の時期のものも少量ながら認められた。ここでは時期毎の概略をみることにし、各遺構別の出土内容は巻末の表を参照されたい。

##### i 平安時代前期

SD16で須恵器長頸瓶、検出面で内黒杯破片が出土したが、いずれも該期遺構に直接関連しない。

##### ii 平安時代末

整地III下の灰黄褐色土層から横田・森田氏分類による白磁V類の碗が出ている。

##### iii 戦国時代

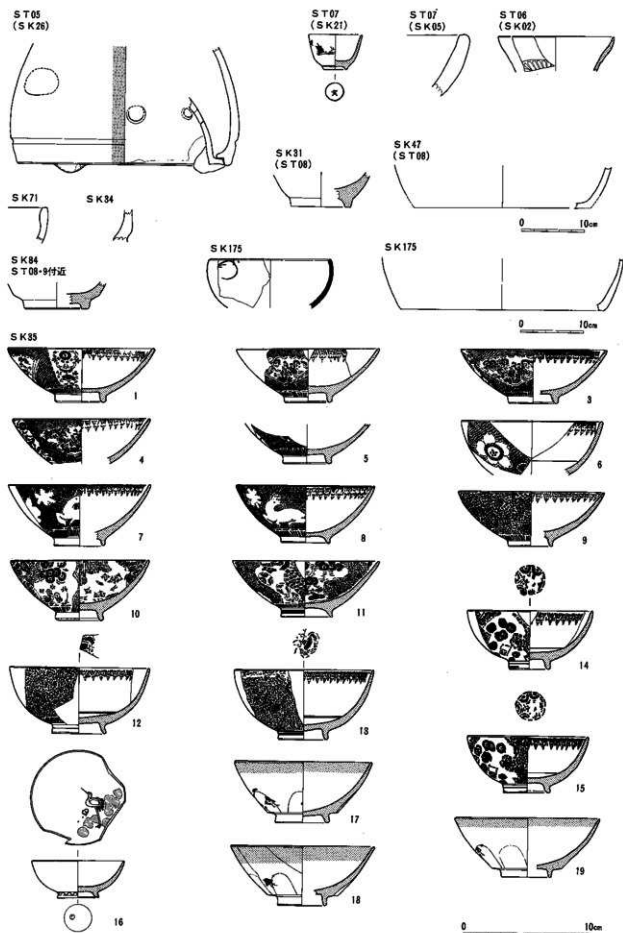
SK47・48・71・213で内耳鍋、SK84から青磁碗が出土し、他の時期の遺構に混入したものではSK175より内耳鍋、SD13・SX1・SH2より細線蓮弁文青磁碗・大窯?香炉、整地Iよりカワラケ、整地IIより内耳鍋、整地IIIより古瀬戸卸皿、整地III下の褐色層からは内耳鍋とカワラケ、検出面からは古瀬戸緑釉小皿が出土した。以上のように既期の遺物のみ出土した遺構もあるが、多くは他時期の遺構に混入し、全体的には調査域の北西部と南東の灰黄褐色層に集中する傾向がある。

##### iv 江戸時代後半

江戸時代前半の遺物はまったくなく、18世紀代以後から認められる。SD16よりは瀬戸美濃産の皿や拳骨茶碗、肥前の染付碗などがまとまり、SK66では肥前の半筒茶碗、SK21で肥前産の染付小杯、SK173より肥前産の京焼模倣の碗が出土している。より新しい時期の遺構に混入したものでは、SK4から肥前産の油壺、SK134で京焼模倣の碗、SD1より肥前産のルリ釉輪秀皿、SD15よりは肥前産の染付碗、SD13・SX1・SH2より瀬戸美濃産の拳骨茶碗、整地IIIよりは肥前産のコンニャク判染付碗が出ている。また、整地Iよりは肥前産と思われる染付の徳利?が出土し、同様のものが整地III下の灰黄褐色土層出土品に見られる。さらに、該期に所属すると思われる灰釉碗はさまざまな遺構から出土している。

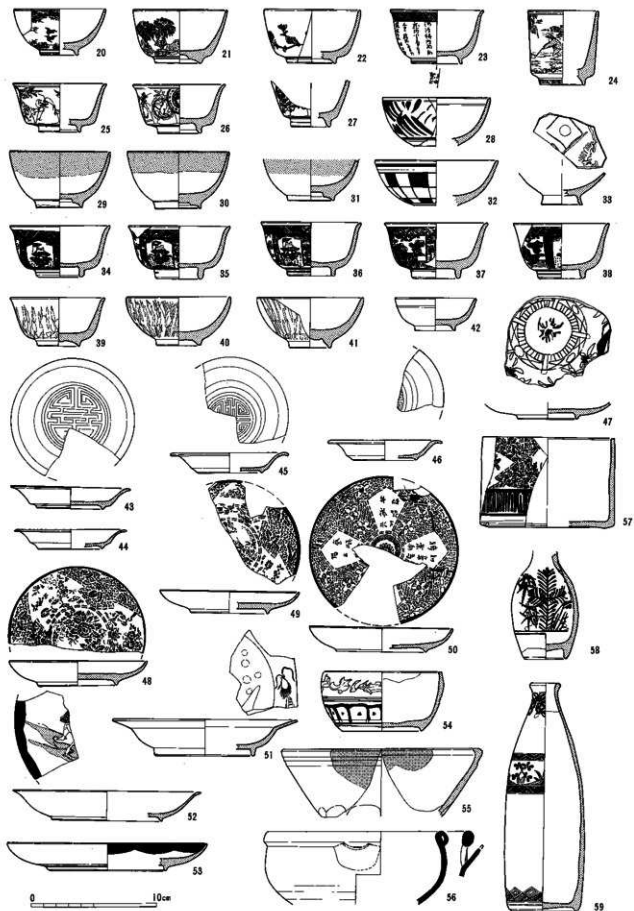
##### v 江戸時代末から近代

今回の調査で出土した焼物の大半がこの時期であるが、各遺構から小破片で少量出土した例が多い。そのなかで直接遺構の使用や廃棄に係わる出土状況を示すと思われた遺構に、SK26とSK35がある。SK26は柱穴であるが、その柱痕上部からは火鉢とも思われる陶器の大破片が出ている。またSK35では近代の陶磁器やガラスが層をなして出土し、一活性の高い資料が得られている。これ以外の遺構別出土品については後表を参照していただくこととして、ここではこの時期と思われる焼物の種類を述べる。



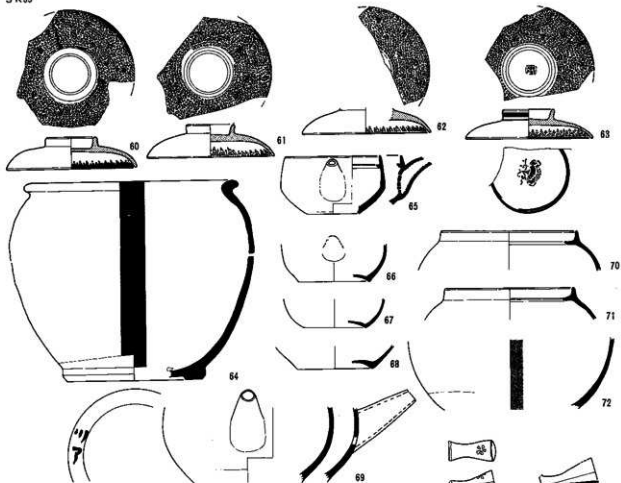
第37図 出土焼物(1) (1 : 3) (SK47・175は1 : 6)

S K 85

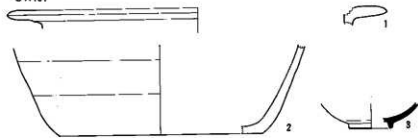


第39図 出土焼物2) (1 : 3) (SD15-3は1 : 6)

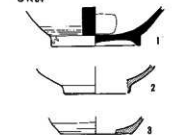
SK35



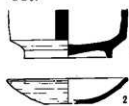
SK134



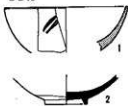
SK04



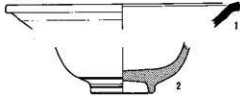
SD01



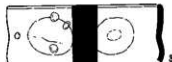
SD15



SD16



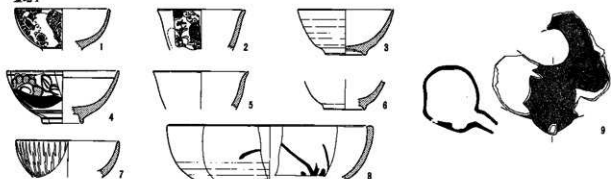
SD11



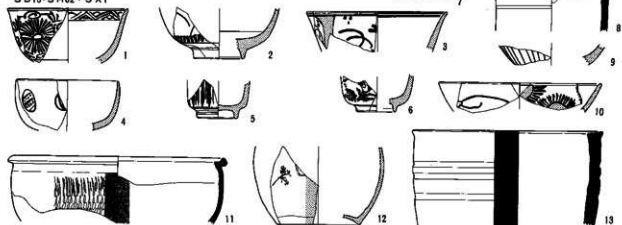
第38図 出土焼物(3) (1:3)



聖地Ⅰ



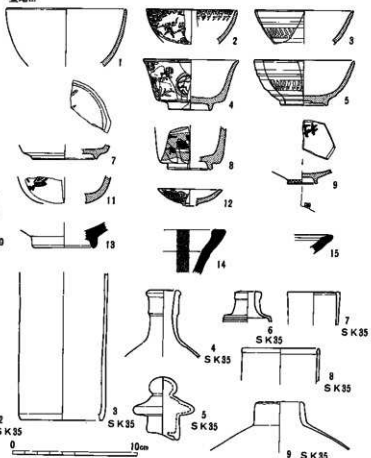
S D13・S H02・S X1



灰黄褐色層

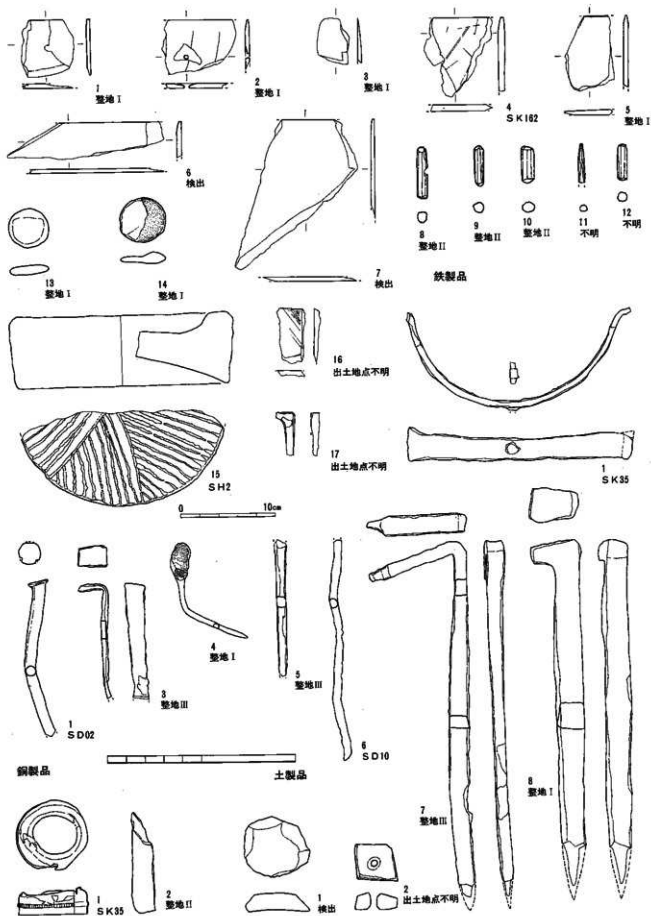


聖地Ⅱ



ガラス製品

第40図 出土焼物(4)、ガラス製品 (1:3) (褐色層2は1:6)



第41図 出土石製品・金属製品・土製品 (1:2) (石製品13:1:6)

該期の焼物には土器・陶器・磁器がある。土器は火鉢・煮炊具類があり、SK5よりは江戸時代の可能性もあるホウロク片、SK134よりは羽釜、SD15と出土地点不明採取遺物で火鉢片が得られている。これらは在地産と思われる。

陶器では土瓶・甕・鉢・灯明皿があり、胎土や焼成状況から数種類に分けられ、その多くが在地産と思われる。白色粒を多く含む胎土に白濁した青緑色の釉を掛ける松代焼と思われる甕と鉢がSD13・SX1・SH2と検出面から出土した。産地不明品には検出面で出土した暗灰色の焼き締まった胎土に鉄釉を掛ける壺、明褐色の胎土で錆釉を掛ける灯明皿があり、SK4・35、SD16・13、SX1・SH2より灰白色・明灰色の胎土で灰釉を掛ける低火度焼成の土瓶・灯明皿・行平鍋が出土している。また、SK35よりは灰白色で焼き締まった胎土の鉄釉甕や同様の釉調でやや荒い焼上りの香炉？、SK4・整地Ⅲから播鉢、SK26より緑色釉をかけた火鉢か蠅取と思われるものが出土している。また、SD35より灰色の緻密な胎土に黄色味や灰色の灰釉を掛ける片口と急須が出土している。また、食器ではせつ器で鉄釉を掛け、上絵を施したり、呉須で絵が描かれる皿は出土地点不明遺物に見られる。また、ネズミ色をした緻密な胎土に鉄釉や錆釉を掛け、型打ち成形した燗徳利と思われるものが整地Ⅰ、同種の急須がSK35、SD11より出土している。また、塗鉄した大甕がSD13・SX1・SH2、整地Ⅰなどに認められる。

磁器は食器を中心に認められ、染付と青磁、白磁、上絵付などがある。染付は手描、クギで引っ掻いた後に呉須を入れるもの、紙型摺、銅版転写が見られる。手描の呉須絵碗はSD13・SX1・SH2でまともって出土し、他に整地Ⅰ・Ⅲでも認められた。他に小型の徳利がSK35、皿が整地Ⅱで出土するが量は少ない。また、クギで引っ掻いた上に呉須でなぞる皿が整地Ⅲで1点、碗と思われるものが検出面で1点ある。紙型摺はSK35で碗・蓋・皿がまともって出土し、他にはSD9・11、整地Ⅰ・Ⅱ・Ⅲで小碗や碗が出土している。銅版転写は黒、緑、青色があり、器種では小碗と徳利が主体で、わずかに碗がある。この銅版転写をもっとも多く出土した遺構はSK35であり、他に整地Ⅰ・Ⅲでも少量ある。青磁は外面はカンナはじきや傾りの装飾が施され、黄緑色を呈する小碗がSK35、整地Ⅰ・Ⅲで見られる。白磁はSK35からスタンプ施文した皿が数個体ある。上絵付には赤・青・緑・黄色・金色など多彩に装飾された小碗、皿があり、SK35とSD11・整地Ⅰ・整地Ⅲから出土している。なお、整地Ⅲ出土の「村」と上絵付された杯は注文で入れられた可能性がある。これらの磁器は瀬戸・美濃産を含むものの、厳密に産地の比定は行えなかった。他にSD2に埋設されていた土管や、わずかな瓦片が採取されている。

## ② ガラス (第40図、PL17)

SK35より板ガラス・ビン・水注・蓋が多量に出土し、SK9・66・134、SD2よりは板ガラス片、整地Ⅰよりはビン片が出土している。図示したものはSK35出土で1・2は茶色、3・4はブルー、他は透明である。なお、板ガラスは学校時代のものと思われる。

## ③ 金属製品 (第41・42図、PL16)

鉄製品では大型の釘が整地Ⅰ・Ⅲで出土し、小型の釘は整地Ⅰ・Ⅲ、SD2、用途不明の針金状のものがSD10、先端を折り曲げた板状のものが整地Ⅲで出土している。なお、大型釘の断面形は方形を呈し、特に2は途中でねじっている。小型の釘は断面円形で現在のものとかかわりない。銅製品は蓋と用途不明の



第42図 出土貨銭

板がある。銭貨は5点採取され、SK10より「寛永通宝」、SD16より「元豊通宝」、検出面より「開元通宝」、「寛永通宝」、「五銭」各1枚ずつ出土した。

#### ④ 石製品・土製品 (第41図、PL16)

1~7は頁岩製石版でSK162、整地I、検出面で発見された。8~12は石版とセットになる滑石製石墨で何れも使いこまれている。整地II、検出面で採取されている。13は整地Iから出土した頁岩製碁石、14は泥岩製碁石である。15はSH2から出土した石臼で、16は出土地点不明の砥石、17は破破片である。また、土製品として周囲を打ち欠いた内耳鍋片と、研磨穿孔された陶器片が採取された。

### (4) 小 結

#### ① 平安時代以後の焼物

##### ア 遺構内の出土傾向

本遺跡出土の焼物を年代別に破片数で集計したものが第44図である。図をみると大きく6つの段階があり、江戸時代後半以後は連続するものの、他は継続性がなく短期に出現して消滅していることが知られる。さらに江戸時代後半以後の器種別組成をグラフにしたのが第44図である。このグラフは各陶磁器を遺構から切り放して同時代と思われる焼物を集計したため、各焼物の年代比定に幅があることや、年代の不明なものを除いている点、さらに発掘における採取のさまざまな条件があるので使用状況に則したとは言い難い。しかし、一定の出土量がある場合にはこのサンプルが母集団全体の傾向を表現するとも思われるので概略の傾向として把握し、さらに他の遺跡例と比較検討してみることにしたい。

まず、江戸後半期であるが、該期は食器のみで占められており、播鉢など調理具や貯蔵具の欠如することから、遺跡内で恒常的な居住が営まれたとはいえないように思われる。江戸時代末は食器の量は多いが、調理具なども認められることから、遺跡地内で居住があった可能性がある。また、近代では食器の量も相変わらず多く、少量ながら調理具や貯蔵具も使用されており、恒常的な生活が営まれた可能性が高いが、食器以

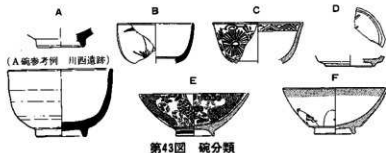


表3 碗の遺構別出土状況

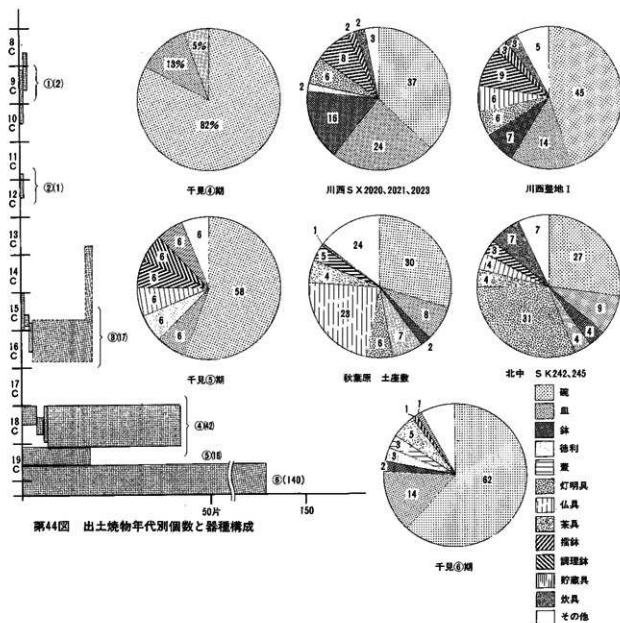
	S K 21	31	35	62	66	93	134	175	S D I	9	11	15	16	S D 13	S X 1	S H 2	整地 I	整地 II	整地 掘下	
碗A	1							1		1	1	1	4	1			3	2		1
B																				
C												1		4			2	1	1	
D																				
E			18								1			1			2	1	1	
F			21							1							1	1	1	
青磁	*1		3														4	2		
上絵付	*2		3	1							1						2			
肥前染付	*3	1	1			1			1				1							1
肥前陶	*4						1					1								
瀬戸美濃	*5												1							
陶器														1						
不明						2				1	3	3		3			1	1	1	5

\*1 外面にカナナはじきの施文がある青磁小碗。

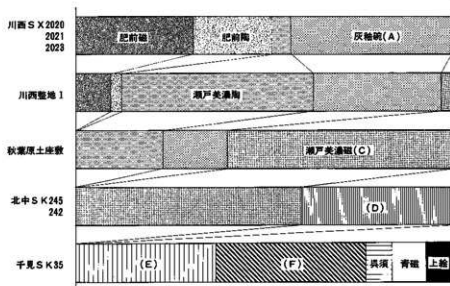
\*2 青・赤・黄・金などの上絵付碗。

\*3・4 大橋1984による18世紀代の肥前碗。

\*5 藤沢1887~1989を参考にした18世紀代の瀬戸美濃産の碗。



第44図 出土焼物年代別個数と器種構成



第45図 碗の焼物種別構成

外の器は量的に少なく完全な居住があったとはいえない状況もある。

### イ 江戸時代後半から近代の変遷

ここでは本遺跡で出土した江戸時代末期から近代の焼物年代の概略を瀬戸・美濃での検討と、県内の消費遺跡出土品の比較から類推してみることにする。

#### a 碗の分類と出土状況

まず、以下のように出土量が多く、特徴的な食器を取り上げ、遺構の切り合いと出土数の比率の組み合わせをみてみた。(表3、第43図)

- A 畳付を除く全面に灰釉が掛けられる陶器碗。瀬戸美濃産の可能性はあるが、ここでは別に扱う。
- B 磁器を模倣し、呉須で施文した陶器碗。瀬戸美濃産と思われ、19世紀初頭に位置づけられる。
- C 腰が張り、口縁端部は外反、直立し、呉須による線描を中心として施文される磁器碗。19世紀前半に位置づけられている。
- D クギで引っ掻いて施文し、その上に呉須でなぞる磁器皿(碗)。
- E 紙型摺で施文される磁器碗。腰が張るタイプと高台から直立するタイプがある。出現は明治20年以後とされる。
- F 銅版転写で施文される碗。小碗が多い。出現はEにやや後出するも、同時存在とされる。

上記のうち、Aの灰釉碗のみは、SD16など切り合いでも古い遺構で確認され、19世紀後半に位置するE・Fを主体とするSK35では見られないことから、江戸時代に属する可能性がある。また、混入の疑いのあるSD13・SH2・SX1を除けば、DはE・Fと共存せずCと近い位置にあると考えられる。また、E・Fはカンナはじきを特徴とする青磁や上絵付けの碗と伴出する傾向がある。B・Dは検出面で採取されたのみで子細は明らかでない。以上の傾向は以下にのべる他遺跡とおおむね矛盾しない。

#### b これまでの検討と他遺跡の出土状況

次に県内の調査例を参考にして、年代的位置と他器種との共存関係を検討してみる。

##### ● 塩尻市吉田川西遺跡 [中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書3 吉田川西遺跡1989]

塩尻市に所在し、1985・6年に調査、1989年に報告されている。ここでは整地を伴う近世屋敷地が検出され、整地下にSX2020・2021・2023、整地上では建物や土坑が検出されている。なお、この屋敷地の住人は明治初年に移転したとの伝承がある。

##### 整地下SX2020・2021・2023

肥前産の染付碗・皿、瀬戸美濃産の鉢類・灰釉碗、産地の明らかでない摺鉢などが出土している。碗に限定してみると量は灰釉碗と肥前産がほぼ同量あるが、法量上の種類は後者が多い。遺構の年代は口縁に呉須を掛ける18世紀末以後と思われる瀬戸美濃産小碗から17世紀の志野皿などが含まれ、かなり年代幅があるが、主体は18世紀後半にあるように思われる。

##### 整地上

多様な瀬戸美濃産と思われる碗・灰釉碗・摺鉢・鉢などがあり、一部在地産の陶器も入るようである。特徴としては肥前産の陶磁器類の減少と瀬戸美濃産の増加が認められる。なお、整地上面のSK2014出土の灰釉碗は整地下から出土した同様の碗と比べると器高・口径も小さく、この手の碗の型式変化を示している可能性をもっている。また、この川西遺跡では19世紀前半に位置づく瀬戸美濃産の呉須施文の陶器食器類は、遺構外を含めてもあまり検出されていない。

##### ● 松本市秋葉原遺跡 [「松本市新村秋葉原遺跡」松本市教育委員会1983]

ここはかつて18世紀中頃に移転した専称寺があった場所とされる。墓と土座数とよばれる建物跡が検出され、出土陶磁器では土座数が新しい様相をもつ。土座数出土品では土器火鉢、鍔手茶碗やAの碗、体部

下半まで灰釉を掛ける碗、鉄絵の皿、灯明皿、土瓶、行平といった陶器があり、磁器は碗、皿を中心としてかなりの量が見られ、食器全体のなかでは磁器のほうが多い。また、土瓶、陶器灯明皿、土鍋など在地産と思われる雑器が見られる点は注意される。

●北中遺跡 『中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書10 南中遺跡 北中遺跡 上手木戸遺跡』1989

SK242・245では陶器の碗、特にAの碗はまったく出土せず、すべてC・Dの碗で占められる。他に灰釉・鎔釉の灯明皿、土瓶、在地産の鉢が認められる。この遺構は明治初年に建てられたとされる大日堂との関係も想定されている。

以上のなかではE・Fを中心に出土する遺構例はないが、伴出遺物などから江戸後半期からE・Fの碗出現期までの様相が概略追えると思われる。それをまとめると以下ようになる。

**18C～19C初頭** 吉田川西SX2020・2023を代表とする。

灰釉碗はほぼ1法量、肥前の磁器・陶器は法量の多様な碗があって量自体は拮抗している。後出する整地土出土品では瀬戸美濃産の陶磁器碗が量も種類も増加する一方で肥前産の陶磁器碗は減少している。従って、川西遺跡例から肥前産の陶磁器の減少に伴う瀬戸美濃産の碗の相対的な増加傾向と、それが器種分担を含めた移行である可能性を捉えることができる。しかし、この変化の要因は不明である。また、食器では鉢が一定量ある点、灯明皿は土器であること、土瓶や急須といった飲茶具、行平などの土鍋がない点が注意される。年代としては伴出している肥前産の磁器、瀬戸美濃産の陶器の年代から18世紀後半から末を中心とすると思われ、次の秋葉原遺跡土屋敷例との間に若干時間をおく可能性もあるが、次段階との関連で19C初頭まで含めておきたい。在地産の陶磁器は出現している可能性が高いがその様相はよくわからない。

**19C前半** 秋葉土屋敷、北中遺跡SK242・245を代表とする。

灰釉碗のA、瀬戸美濃産陶磁器碗が減少し、陶器C碗が増加する段階である。北中遺跡例では陶器碗Dが含まれるが土屋敷にはないので、DはCと一部並行するものの、若干後出すると推定される。この段階で注目されるのは陶器の灯明皿が大量に出現し、土瓶や行平などの煮炊具も見られる点である。しかし、急須は少ないか、無い可能性もあり、これは飲茶の方法による可能性もある。また、食器の大型鉢も減少傾向にある。土器のホウロクや貯蔵具については様相を明らかにしえない。この時期には確実に在地産と思われる陶器が含まれ、食器以外の部分を主体に分担するようである。この段階の年代は土屋敷例が灰釉碗を少量ながら確認できる一方で磁器碗が認められ、前代の様相を引き継ぎながらも瀬戸美濃産磁器碗が出現していることから磁器碗出現の早い段階と推定し、瀬戸の編年研究から19世紀前半と推測した。

**19世紀後半以後** 本遺跡のSK35を代表とする。

紙型摺と銅版転写の染付、カンナはじきを特徴とする青磁、多彩な上塗付の磁器で食器が構成されている。SK35では先に報告したような在地産の多様な焼き物が含まれるが、灯明皿、土鍋類がなく、急須が認められる。本例では食器以外の様相は明らかにしえず、また、先の北中例とは断絶があるので、今後の検討に期する所が大きい。

以上、松本平を中心に江戸後半から近代の陶磁器の変遷の概略をみた。良好な比較資料がなく、在地窯製品についても子細に調べられなかったので大凡の傾向として把握せざるをえないが、ここでは上記の検討からAは18世紀、B・C・Dは19世紀前半、E・Fは19世紀後半以後と比定しておく。また、SK35出土のカンナはじきを特徴とする青磁碗もE・Fとの共件例からほぼ同時と捉えておく。なお、在地産の陶磁器について産地、型式変遷等を明らかにできなかった点は問題として残る。

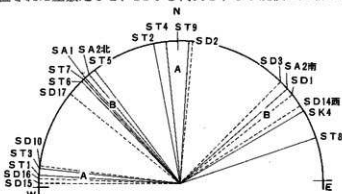
## ② 遺構の変遷

ここでは遺構の軸方向と配置、および切り合いから遺構の変遷を把握し、先に検討した遺物と合わせて遺跡の変遷を考察する。

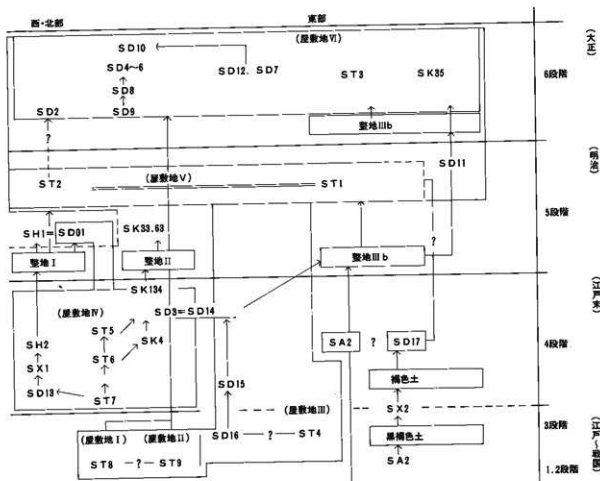
検出された遺構の軸方向をみると大きく3つの集中がある(第47図)。しかし、Aグループは90°振ると大きく2つの集中と認められ、この同軸方向の遺構群は何らかの関連の元に構築されたと考えられる。これらのグルーピングに遺構の切り合いや配置関係を加味して検討すると、建物跡を含む複数の遺構集合としてまとめられ、これらを屋敷地Ⅰ～Ⅳとした。勿論、後の述べるように居住の屋敷地ばかりではないのでその呼称方法には問題がある。

### 1・2段階

ST8を中心に東段丘境にSA1・2が配置された屋敷地Ⅰと、ST9を代表とする小規模な建物が繰り返して建て直されたと思われる屋敷地Ⅱの段階である。屋敷地Ⅰは出土遺物から戦国時代で、遺物から確認できるもっとも古い居住遺構である。屋敷地Ⅱは年代を示す遺物は採集されず、また、屋敷地Ⅰと直接切り合いが認められないことからその前後関係は明らかでなく、次の段階にも存在した可能性も残るが、両者は重複した場所において同時存在はありえない。



第47図 遺構の主軸方向(実線はST・SA、破線はSD)



第48図 遺構変遷の概略(↑は切り合い、=は軸方向等から同時代と思われるもの。)



い。また、SA1はその軸方向や配置関係からST8に関連すると推測して屋敷地Iに含めて考えたが、検出面の土層からは若干問題も残る。この段階の屋敷地は後段階とは軸方向を異にしている。

### 3段階

この段階はSD16と、同じ軸方向をもち、SD16区画内に位置するST4の組み合わせでの屋敷地IIIが出現した時期と捉えた。また、東傾斜地の灰黄褐色層からもSD16とほぼ同時期の遺物が検出されていることから、段丘境の傾斜地に階段状の削平も行なわれたと考えられる。この東傾斜地やSD16の遺物から屋敷地Iには明らかに後出するが、2段階としたST9がこの段階に所属していた可能性も否定できない。なお、ここで注目されることは、SD16によって区画された屋敷地IIIを避けて、次の屋敷地IVが構築されていると認められることである。また、SX2が耕作痕とすれば、東傾斜地は耕作地になっていたと考えられる。この時期の年代は出土遺物から18世紀後半頃と考えた。

### 4段階

この段階は主軸方向Aグループで占められていた3段階にかわり、主軸Bグループの建物群である屋敷地IVが出現し、屋敷地III以外の場所を新たに編成してしまう段階である。この様相は特にSD15・16に顕著に認められ、旧米から存在するAグループのSD15にBグループのSD14・3が接続して構築されている。なお、北西端部の段丘境はこの段階に遺構の構築が目まぐるしく変化するようである。

### 5段階

この段階は主軸方向Bグループの区画が消滅し、新たに主軸方向Aグループの屋敷地Vが整地を伴って出現する段階である。この屋敷地VはST1・2の礎石建物2棟から成り立ち、遺物や切り合いからは近代に所属すると思われる。遺構配置は美麻村の学校百年誌に紹介されている明治23年ごろの千見学校に類似し、ほぼ比定できるとと思われる。

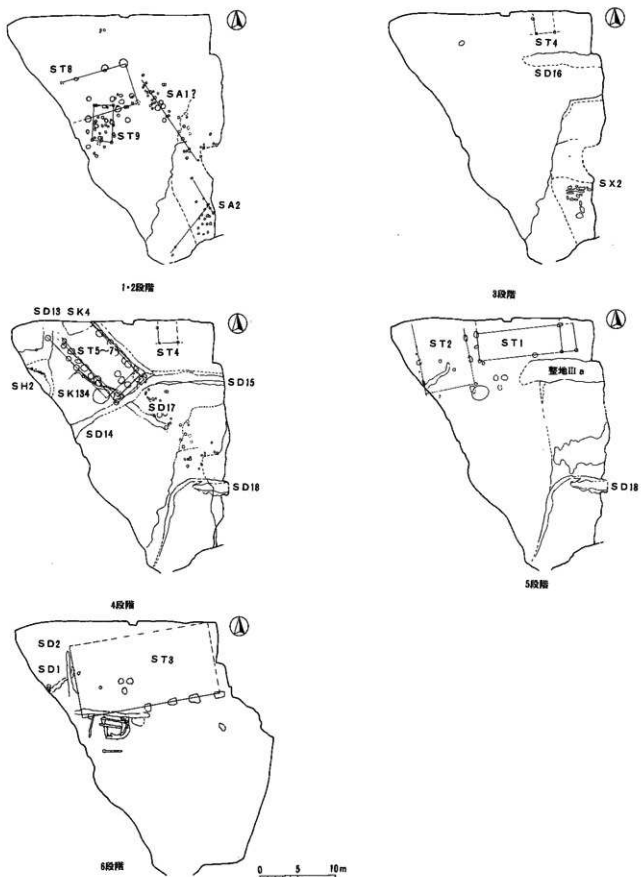
### 6段階

この段階は東傾斜地が整地IIIbによって埋め立てられ、ST3を中心とした屋敷地IVが出現した時期である。ST3は規模の大きな建物であるが、先に述べたように建て直されている可能性もある。年代は整地やSD2の出土遺物から近代であり、これが改築された千見学校にあたると思われる。

以上の変遷のなかでは1段階の屋敷地は後段階の遺構の軸方向と異っており、軸方向の継続性が認められないことから、やはり後の段階とはまったく異なる屋敷地と考えられる。2段階は不明な点があり、3の段階に含まれる可能性もある。3・4段階は連続するもの、後出する屋敷地が新たな軸方向をもつ区画で編成されていく段階と捉えられる。そして5・6段階は整地を伴って、まったく異なる計画性で再編成していくようすが伺えると思われる。最後に各段階の年代的な推定を繰り返すと1段階は戦国時代、2段階は不明であり、3段階は江戸時代後半の18世紀後半、4段階が19世紀前半、5から6段階が19世紀後半頃となろう。

### 参考文献

- 藤沢良祐「本業焼の変遷(1)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VI』1987 瀬戸市歴史民俗資料館  
 藤沢良祐「本業焼の変遷(2)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VII』1988 瀬戸市歴史民俗資料館  
 藤沢良祐「本業焼の変遷(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VIII』1988 瀬戸市歴史民俗資料館  
 藤沢良祐「本業焼の変遷(4)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要IX』1989 瀬戸市歴史民俗資料館  
 仲野泰裕「長野県出土の近世陶磁器」『愛知県陶磁資料館 研究紀要4』1985 愛知県陶磁資料館  
 『塚原山西窯跡』1993 瀬戸市教育委員会  
 大橋康二「肥前陶磁の変遷と分布」『国内出土の肥前陶磁』1984 九州陶磁文化館  
 大橋康二「肥前陶磁の流れ」『季刊考古学13』1985



第48図 戦国時代～近代の遺構変遷

## 2 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代に所属する遺構・遺物の検出面は大きく2つ認められた。ひとつは基本土層b群上面に位置する包含層であり、もう一つはSF1が検出されたb群中である。SF1は遺物が出土しなかったが、炭化材の放射性炭素年代測定により、縄文後期に所属する可能性があるため本項で扱うことにした。

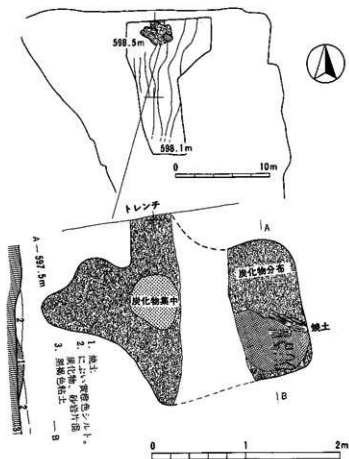
## (1) 包含層と基本土層b群上面検出遺物 (第50～52図、PL17)

包含層は東段丘陵傾斜域に分布し、段丘が完全離水して安定した段階に形成されたと思われる。上部には基本土層のc群をのせている。基本土層b群上面の他時代遺構の混入と、包含層から出土した土器と石器は図示したものがあつた。1・2はSK215、5はSQ1として取り上げたもので、他は包含層出土である。1は称名寺II式から堀之内I式と並行する浅鉢で、3は底部に網代底を残す。4は後期後葉の深鉢の把手、5～8は羽状沈線が特徴的な同時期の深鉢、9・10は浅鉢と思われる。石器は石鏃と剥片が各2点出土し、石質は1～3がチャート、4は頁岩製である。なお、2は整地IIから出土している。

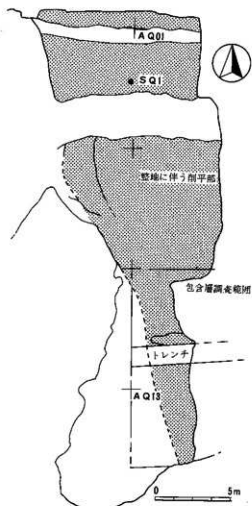
## (2) 基本土層b群中の遺構

## SF1 (第49図、PL9)

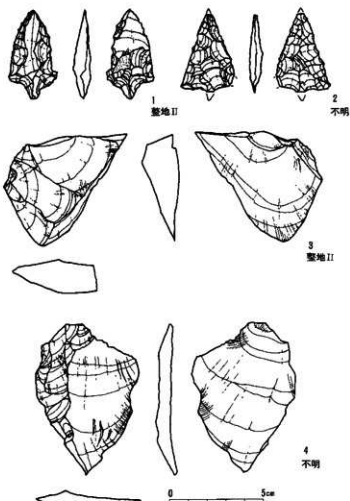
地形形成過程をみるための土層観察用トレンチを調査域北際と中央に設定したが、中央トレンチにかかって地表下約1.3mで焼土跡が検出された。この焼土跡をSF1として周辺を拡張してみたが、他の焼土跡や遺物も一切確認されなかったので単独で存在する遺構と判断した。b群の暗褐色土層上面で検出したが、この土層は大きく西から東へ傾斜しており、本遺構はその傾斜のやや緩い場所に作られている。長軸90×短軸60cmの範囲に焼土があり、その上面には炭化材が並列するように4点検出された。この焼土から西にかけて約3.4m×2.6mの範囲に炭化物の小片が散っている。土器や石器は一切出土せず、単独で存在することから一時的な焚所と推定された。なお、炭化材は放射性炭素測定を行ったが、その分析成果については次項に掲げた。



第49図 SF1 (上図1/400、下段1/40)



第50図 縄文包含層分布と調査範囲

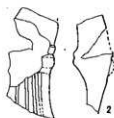
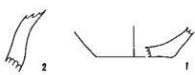


第51図 出土石器 (S=1/1)

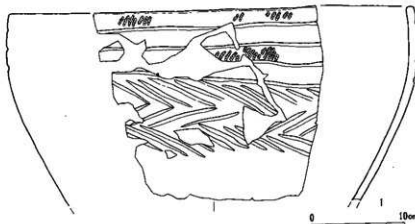
SK215



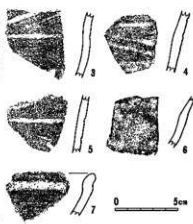
包含層



SQ1



第52図 出土縄文土器



〔付〕 千見遺構SF1出土炭化物の年代測定

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

千見遺構（長野県北安曇郡美麻村大字千見）は、土尻川左岸の河岸段丘上に立地する。今回の発掘調査によって、縄文時代後期包含層の下位より焼土が検出された。焼土が検出された層は礫層よりやや上位であったが、離水直後に火が使用されたものと考えられている。段丘の離水時期を知るうえで、この焼土の年代推定は重要と考えられた。しかし、この焼土の年代を考古学的に推定し得るような遺物はまったく検出されていない。そこで、この焼土より出土した炭化材について<sup>14</sup>C年代測定を行い、年代推定を行うこととした。

2. 試料

焼土SF01より出土した炭化材1点を測定試料とした。

3. 測定

学習院大学放射性炭素年代測定室木越邦彦先生にお願いした。なお、半減期はLIBBYの半減期5570年を使用している。

4. 結果と考察

年代測定値は、3330±90y, B. P. (1380B. C. : Gak-17653)であった。この値は、既知の資料（キーン・武藤 1982）からみて、縄文時代後期頃に相当し、焼土の上位に縄文時代後期の遺物包含層が存在することと何ら矛盾しない。珪藻分析等により離水過程の復元を行ったうえで判断すべきであろうが、現地所見に従えば、この段丘の離水、焼土における火の使用、遺物包含層の形成は大きな時間間隙をもちつつ起こった可能性がある。

参考文献

キーン・C. T.・武藤康弘 (1982) 『縄文時代の年代』『縄文文化の研究』第1巻縄文人とその環境 雄山閣 p.246

## 第4章 成果と課題

### 1 縄文時代後期

基本土層 b 群内で検出されたSF1は、出土炭化物の放射性炭素測定により今から約3330年±90年前という年代が得られた。この年代は縄文時代後期にあたり、上部にある土器包含層との関連から、b群土層の堆積と段丘の離水はこの縄文時代後期に著しく進んだと考えられる。従って、美麻村の土尻川上流域の上位河岸段丘で、縄文時代後期以前の遺跡が知られていないのは段丘形成が比較的新しいことによる可能性もある。本遺跡はこのような環境変化のなかで、恒常的な生活というより臨時の活動の場として使われたと推定されるが、県下の後期後葉遺跡の激減傾向と周囲の遺跡数の少ない状況を考えあわせると、段丘の安定化のみでは本遺跡出現の背景を説明しきれないようにも思われる。

本遺跡周辺では縄文時代中期に遺跡数が増大するが、その様相は中規模遺跡を核として小規模な遺跡が関連しあって遺跡群を構成する(註1)が、後期前葉には小規模遺跡が点在するのみとなり、遺跡群の構造変化を伴って数を減少させる(註2)。ところが、その一方で北村遺跡などの大規模遺跡を核とした重層的な遺跡群(註3)が展開する地域も対極にあり、地域的な様相の違いも顕著に認められる。次の後期後葉では後期前葉の様相が継承されると思われるが、県下で大遺跡は知られておらず、その様相はさらに分かりにくい。本遺跡周辺で該期の土器を出土している主要な遺跡は中条村の宮遺跡が知られ、他に小遺跡があるが子細は明らかでない。宮遺跡(註4)の評価は難しいが、全体的に小規模遺跡が土尻川沿いに点在する様相ではないかと推定する。従って、この遺跡分布の変遷をみると、本遺跡周辺では後期に遺跡数を減少しながら小規模遺跡中心になり、それが土尻川流域に集中する状況に変化するとも思われる。そこで本遺跡の成立の背景として2つの可能性を推測しておきたい。

一つは生業関係の遺跡ではなく、交易、移動に関わる遺跡ではないかという推定である。この推測には県北西部に産出する蛇紋岩製磨製石斧、あるいは量は少ないが県境に産出するヒスイの搬入があると思われることによる。今後、土尻川流域の一定範囲に小規模遺跡が分布する様相が確認できるならばより可能性が高くなるであろう。

もう一つはまだ大規模な遺跡として認知されない遺跡があるのか、それともこの時期が小規模な集落が点在する、いわば散村形態に類する居住様式であったか、採集活動の領域が非常に広範囲にわたる可能性である。これについては環境や生業の地域の様相を含め今後の検討によることとしたい(註5)。

以上、少ない資料から遺跡出現の背景について2つの解釈を試みたが、それらは検討不十分なままである。今後、この時期の全体の様相が明らかにされてくるなかで改めて検討しなおす必要がある。

### 2 平安時代

縄文時代の次に人間の活動の痕跡が認められるのは平安時代である。本遺跡では遺構の検出はなく、9世紀に比定される遺物が出土したのみである。県内では9世紀後半に水田耕作不可能と思われる場所に突然出現する小規模な遺跡が知られるが、これらの遺跡は永峯氏が報告(註6)して以来、多くの検討が重ねられている。桐原氏は永峯氏の検討を受けて「山樺みの住居」として山中流浪の職人などの居住遺跡であろうと指摘(註7)したが、笹沢氏によって遺跡立地の定義が曖昧であること、中には沢などの小河川を使つての稲作もありうるとの批判が(註8)出された。しかし、高村氏によってやはり稲作以外の生産に立脚する居住があることが指摘(註9)され、更に群馬県の古墳時代から平安までの水田耕作と集落の歴史的

景観変化をまとめた能登氏等によって、これらの遺跡が律令制の圧力から逃れるために島を基盤として出現したと指摘(註10)されるに至っている。県内では近年の平地部調査の進展によって、山中に散在する集落も平地部の大規模集落の展開と表裏一体の関係にあることが知られ、その出現が山中の開発が律令体制の反動なのか明らかでないものの、古代集落全般の動きのなかで理解されうること(註11)が判明してきている。本遺跡の場合、遺物の検出のみなので、活動の内容や遺跡出現の背景はよくわからないが、9世紀後半の水田耕作不可能な土地に立地し、平安時代の一時期に出現した遺跡であることは間違いないように思われる。そして、県内の他地域の例をみても平安時代後半に連続しないことから、これらの遺跡が中世の生活領域形成に直接関連していく可能性は低いと思われる。この中世への連続の問題を考える時には平安後期の様相の検討が不可欠であり、また、平安時代の村や地域の分業の問題、特にこの地域では麻の問題の検討が必要と思われる。

### 3 戦国時代

本遺跡では15世紀末から16世紀前半の遺物が採取され、同時期と思われる建物跡も検出されている。長野県内では該期の集落遺跡の様相は十分検討されていないが、管見に触れたなかでは散在する居住遺跡と防御施設を強化して複数の居住者が集合する館・城館等の遺跡が知られる。検出された建物だけをみると単独で存在する屋敷地の可能性もあるが、本遺跡の背景に千見城があるため城との関連も無視できない状況もある。そこで、少し千見城と本遺跡の関係について検討を加えてみる。

#### (1) 千見城の展開

千見城との関連を検討するために、まず問題となるのは千見城の構築・存続年代とその役割の変化である。この問題を解決する手掛かりとしては千見城自体の構造や形態から構築主体や年代・機能を検討していく方法と、文献の記録との比較で類推する方法があるが、後者ではさらに記載された千見城が遺跡背後に立地する城と同一であるか否かの検証も必要になる。しかしながら今回は千見城自体と周辺の山城の検討が行えなかったため、ここでは片手落ちながら文献記載との比較を試みる。

一説(註12)によると南北朝以後、隣の小川村一帯は小川氏が支配するところであったが、戦国時代の16世紀に大日方氏が侵入して小川氏にかわって支配するようになる。そして、一族の勢力範囲は順次拡大して土尻川流域から白馬にいたる範囲を領有するようになり、千見にも一族が配置されたが、武田氏に安曇方面から千見まで攻められて大日方氏も武田氏の軍門に下ったという。しかし、根拠となる史料がよくわからないので何ともいえない。そして、確実な記録は16世紀中頃からみられる。16世紀中頃、武田信玄は信濃に侵入して在地の土豪を支配下に組み込んでいくが、そのなかで千見に近い現小川村にいた大日向氏にも所領安堵の書状を出している。この安堵状には千見西隣の青具の名がみえるので、この時期に千見を含む一帯は大日向氏が支配していたと推定されている。また、弘治元年(1555)大日向氏は武田信玄に感状を与えられているが、それには「千見之地被兼取候」とあり、これが千見城が文献に現われるもっとも古い記録とされる。ここには千見城の構築主体は述べられていないが、千見が一時的にしろ反武田勢力の支配下にあったことが知られる。

その後の武田氏支配から織田氏の侵入・滅亡までの間に千見城の記録はないが、16世紀後半に北信へ上杉氏、中信に小笠原氏が入り支配域をめぐる争いが繰り返されるようになると再び文献に現われるようになる。まず、上杉氏は天正11年(1583)安曇に攻め入り、それに先立ち大日向氏に千見城を陥めさせている。しかし、翌年の天正12年(1584)には小笠原支配下の仁科衆が鬼無里へ攻め入り、併せて千見城を奪って同年2月には沢渡盛忠、浜田源助等の小笠原支配下の仁科勢と二木・征矢野といった譜代の武士が城番に命ぜられている。ところがほどなく上杉氏が奪回し、同年4月には配下の須田信正、市川信房に

千見城番が命ぜられている。そこで、小笠原氏は仁科勢に攻撃させ、一度は失敗したものの、再び攻め落し、普請奉行として二木盛正、山田善兵衛らを派遣し、協力して普請を行なうように仁科衆に厳命を下している。天正17年(1589)には小笠原氏は朝野久右衛門を千見城番に命じ、それまでの城番であった沢渡氏の労をねぎらっている。

こうした争乱も両者が小田原攻めに駆り出され、まもなく移封されたことで終結する。その後、慶長7年火町周辺に住む郷土が鉄砲をもった下位の郷士10名とともに千見につめることを命じた文書(註13)があるが、城に詰めたのかは明らかでない。

以上のように千見城は何時、誰の手によって作られたのか明らかでないが、16世紀後半から文献に現われ、それは大きく2時期に分けられる。一つは武田氏支配の時代、土豪大日方氏のもらった安堵状・感状に認められるように土豪がこの地域の直接的な支配者として現われる段階である。もう一つは小笠原と上杉氏による支配領域をめぐる争いのなかで、いわゆる「境目の城」として現われる段階である。この2つの時期は近接しながらもまったく異なった性格が付与されていると思われる。つまり、前者の段階では誰が構築したか明らかではないが、土豪の大日方氏の支配域内に作られ、それが武田氏の侵入以後は武田氏の支配体制とはまったく別に存在する。ところが、後者は小笠原氏といった戦国大名が係ることにより、求心性の高い城下の形成と支配領域の体制整備とが表裏一体をなして、支配境界に政治・経済的な境の機能が与えられたと思われる段階である。このことは江戸時代に松本藩の番所が配置されることと関連すると思われる。さらに、周辺の山城分布(註14)は千見周辺と牧の島城を結ぶライン、及び大町峯街道沿いに集中し、その数は土尻川沿いの地帯よりも多いことから後者の段階に軍事的な緊張が高まるとともに、交通の要所を抑える必要がでてきていると考えられる。次に城の機能が異なる2時期のなかで城周辺にどのような施設が合わせておかれていたのかを類推してみたい。

前者の場合、構築主体や構築の契機が明らかでないが、大きくは在地の土豪とその配下や関連村落が係る場合と反武田勢力?による二つが推定される。大日向氏の場合、一族は土尻川一帯に散在していたとされるが、土尻川流域の城は数も少なく距離をおくことから、各城に個別機能を持たせていたというよりも一族の者が散在して館と城をもつ体制であったと推定される。伝承では千見に館があったとされるが、これも確証はないのでこの時期の様相は明らかでないが、仮に土豪の手によるすると屋敷の一部や城の維持のための小規模な施設や、臨時に設置される施設、あるいは小規模な公共の建物があるのであろうか。この段階で反武田側が構築する場合は、山頂で兵員が長期にわたり生活するのは困難なので、城の下に何らかの居住施設があった可能性は考えられる。

次に後者の場合であるが、この境の城について斎藤・松岡氏(註15)の論考を参考にすると、境目の城は複数の城が兵員駐屯、在地支配、情報収集、通報、物資の調達、交通の監視、物資の安定した輸送確保などの機能を分担して「境領域」を形成するとしている。そして、それらの機能が表現される遺構として兵員駐屯なら広大な平坦地の存在を指摘している。この論考を直接当て嵌めることは危険であるが、山頂にある千見城には兵員駐屯、政治・経済的な監視の施設を置くことは不都合であるので、本遺跡を含む段丘部分や谷を使っている可能性は十分考えられる。

## (2) 千見城と遺跡の関係

軍事的な拠点、あるいは逃げ場として捉えられる山城も裾野に館が設置される場合や、周辺に多様な施設を配し、それらの施設と一体化してさまざまな機能を負っていた可能性は考えられる。本遺跡においても山城と関連する施設が配置されていた可能性もあるが、根本的に出土遺物と文献記録上の年代とは若干ずれがあり、城と直接結びつけることは躊躇せざるをえない。また、数少ないながら果内での同様の立地の遺跡と比較してみると、礎石建物や竪穴建物が検出されている例があるが、本遺跡ではそのような建物



遺構がなく問題を残している。

上記のような問題点から、千見城と本遺跡を直接結び付けて理解するには難しい状況もあるが、調査結果自体にも出土遺物の量が少ない点や、遺構に直接結びつく年代決定遺物が僅かであるという問題点がある。さらに今回は文献を中心に比較したが、文献記録に現われる以前のようすが明らかでないので単純に結論を出すことはできない。従って、ここでは結論を保留し、類例の蓄積をまって本遺跡の評価が下されるとしておく。さらに、今後の類例の比較にあたって、山城が軍事的な拠点としてののみ存在したばかりでなく、城の性格によっては周囲に諸施設を配してそれらと一体化して個別の機能をもつ可能性と、諸施設のあり方が当時の村のあり方や在地の土豪支配、戦国大名による領国支配城の形成されていく過程をあきらかにできる可能性があることを指摘しておきたい。勿論、この検討には山城の形態の比較も必要であることはいうまでもない。

#### 4 江戸時代

戦国時代の次に確認される遺構は18世紀のものである。本遺跡の所在地が江戸時代の「善福寺」があった場所と伝えられることより、これらの遺構と寺院の関連が問題になる。そこで文献・字名・周辺の状況と調査結果から善福寺と本遺跡の関連を検討してみることにしたい。

まず、調査結果を確認することからはじめる。調査では江戸時代前半に所属する遺物は出土せず、戦国時代以後からしばらく空白の期間がある。18世紀から再び遺構が確認されるようになり、以下のような遺構の変遷が推定された。

まず、調査域北東部を区画するSD16が作られるが、同時に区画された部分にはST4が存在していた可能性が考えられる。この段階の特徴は焼物の器種構成の上で調理具と煮炊・貯蔵具の欠如があり、恒常的な生活が営まれた可能性は低い。次の19世紀前半ではSD16に並行してSD15が掘り直されるとともに、この北東区画部をさけた西側にST5～7が構築され、やがてSD15上部にSD14が構築される状況が確認された。以上の遺構変遷のなかで注目されるのは調査域北東部の高台である。この部分は溝が繰り返し構築されていることと、江戸時代末の遺構群もこの部分を避けていることから、江戸時代後半から近代以前までの長期にわたって維持される何らかの施設（建物）が存在したと思われる。

##### (1) 善福寺について

善福寺は戦国時代に千見城主であった大日方氏一族の者が武田信玄に攻め殺され、その供養のために一族の手で建てられたとの伝承(註16)があるが定かでない。江戸時代の文献からの検討は高附氏の論考(註17)があるので紹介しておく。善福寺は新儀真言宗で信州新町玉泉寺の末寺として知られ、千見村八幡山無量寿院、善福寺と称していた。その創建年代は明らかでないものの、文献上では松本藩の慶安3年(1650)の検地帳に現われるのが初見であり、この当時の住職は懸僧師範で黒印地六畝八歩を有していた。しかし、千見には檀家6軒のみであったので住職は本寺の玉泉寺へ入院してしまったという。その後、弘化4年(1847)の善光寺地震の時には勝地古跡といわれており、屋敷二畝十二歩、堀田三俵取、上畑三畝六歩、下畑一畝で、住職なきあたりは寺所である千見の百姓に請作付けしていた。その後、玉泉寺側は再び住職を置けるように松代藩を経由して松本藩へ陳情書を提出し、この書類の取次を千見庄屋の永田次郎兵衛に依頼し、永田は大町組の大庄屋へ取り次いだ。藩の証可は下りなかった。やがて幕末にいたり、武蔵より石山某という修験者が永田家と下条家、本寺玉泉寺の証可を得て移り住むようになった。しかし、間もなく明治時代には寺子屋から学校へ移行するに際して廃寺となり、本尊は本寺玉泉寺へ奉送され現在に至っている。

##### (2) 善福寺と調査地の関連

遺跡の一角に「善福寺」の字名がみえるが、この場所は今回の調査で確認されたST5~7が検出された付近にかかる。ところがST5~7は江戸時代末期から近世初頭に所属すると推定されたので、この字名は幕末に移り住んだ石山某の住居を指していた可能性がある。さらにST5~7付近では江戸時代にさかのぼる建物が検出されていないので、幕末に再興される以前は「善福寺」の建物が全く存在していなかったか、あるいは別の地点にあった可能性が考えられる。その場合注目されるのが調査域北東部の高台である。ここは発掘結果からも江戸時代後半から近代初頭まで長期にわたる区画と、何らかの施設が存在していたと推定されたが、この部分をST5~7が避けていることから、先行する「善福寺」関連の堂宇があったとも考えられないだろうか。さらにこの推測が許されるならば以下の様相が類推される。

### (3) 調査結果から派生する問題

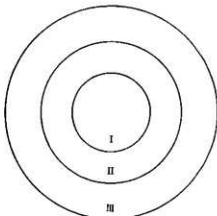
#### ① 江戸時代前半の善福寺

文献上では江戸前半に「善福寺」の名がみえる。しかし、今回の調査では該期の遺物がまったく出土しなかった。発掘範囲内に江戸前半の寺が存在した可能性は低いと思われ、近在にあったとすれば調査域より山手に可能性が残されている。さらに発掘から推測されるように、江戸後期からの寺院関連施設が空白期間において新たに出現するとすれば、文献に見える江戸前半の「善福寺」とは同じ寺でありながら、その存立背景はまったく別に捉える必要があると思われた。特に文献上で職職が転出する年代は寺請・宗門改め制度が実施された寛永・慶安・寛文年間に合致する。従って、文献上の転出理由に檀家が少ないというのはこの制度の施行が背景にあり、また、善福寺の本来の存立背景がこの制度のなかでは不都合を生じるものであったと考えられる。さらに江戸後半の様相は次にのべるように遺跡背後の墓の銘文の年代との比較や、現在の村落景観構造のなかに位置づけると大変興味深い様相がうかがえる。

#### ② 現景観との関連

現在、このあたりは過疎化の進行で谷部へ住民を集める集住も進められているが、かつては屋敷地と耕地、墓がセットになる居住単位が散在する景観であったようである。遺跡の所在する本村地籍もそうした単位の集合とみることできるが、少なくとも先にみたように屋敷・屋敷地の集合する場所を中心として周囲に耕地、山林がひろがり、耕地と山林の境には墓が散在する同心円状の領域構成の景観となる。さまざまな問題はあっても、この千見の景観は民俗学が提起した村落構成モデル(註18)に当てはめて捉えることができ、演繹的にこのモデルから本遺跡の位置を考えると、ここは墓・山林と屋敷をつなぐ耕地域内にあって、仏や神の住まう意識的な外的世界と、人が住まう場所の橋渡しをしている場所といえる。更にこの理解を敷衍化すると伝承の「善福寺」がこの地にあることは村落景観の脈絡のなかで納得しうる位置にあることが知られる。つまり、現景観の形成と密接に結びついて善福寺が存在したとすることができ、逆に善福寺の成立・変容は千見の村落構造の成立・変化のなかで捉えうる可能性も示している。

遺跡周囲は千見本村のなかでも比較的墓地が集まる場所であり、その入り口には地蔵の石像もあって寺院の存在を推測させる十分な条件がある。この周辺で見られる墓地は千見本村でも中心となる庄屋と番所役人、さらに幕末に移り住む石山氏の家と他の家のものが若干認められる。このなかで確認される最も古い墓碑は遺跡背後の斜面にある寛永10年(1636)年銘であるが、周辺の墓地を含めても多



I 「民間の一畫図」→部落→本山村としての領域→ムラ  
II 耕作する田圃→耕地→本産地としての領域→ムラ  
III 利用する山林(原野)→林野→採取地としての領域→ヤブ(ハヤ)

第53図 福田アジオ氏によるムラの領域の模式図  
(『信濃37-3』1985、福沢昭司氏論文より転載)

くが幕末に所属する。しかし、寛永年間の墓碑や周囲に倒れた石塔の存在からもそれ以前に墓地が営まれていたのは確実と思われる。従って、現在みるような墓は幕末に整備されたと思われるが、寺請制度の貫徹のなかで住職不在ながら墓地の形成は行なわれていたと考えざるをえない。このような状況がなぜ進んだのかを解く鍵は、18世紀はじめ頃から広がる民間の葬式・回向の風習(註19)と千見本村の集住が進展したことが背景となろう。千見の集住進展については、現在の墓地の所有者と墓の遡及年代の可能性から、江戸前半段階で現景観の屋敷地群の中心にある庄屋と番所役人の家を中心に墓が営まれたが、江戸後半からその周囲に家が集まり順次拡大していった可能性もあろう。また、新たに加わった家は遺跡背後に墓をもったり、個別に墓をもつようになっていったのではないとも思われる。さらにこの集住進展のなかで葬式や回向の風習の盛行によって、善福寺跡付近が新たに村落内で意味をもって位置づけられる施設の必要性がでてきたのではないだろうか。これが調査で推測された善福寺関連施設であったと考えたいのである。さらにこの傾向のなかで住民の住職を必要とする気運が生じ、それに対応して玉泉寺側の住職を置くとする一連の運動や、幕末に石山某が移り住む背景が生れたと思われる。

以上、善福寺と調査成果と文献・周囲の状況との比較から発掘成果の位置づけをさぐってきた。結論として江戸前期の善福寺については明らかにできなかったものの、江戸後半期には本遺跡の場所が村落景観の構成と密接に結び付いて寺に類する施設が作られ、それは幕末の善福寺へ継承されていくように思われた。従って、江戸前半期と後半期の善福寺は村落との関連も成立背景も異なるものと思われる。また、善光寺地震前後の遺跡の様相など文献検討の見解と発掘所見の間に違いが認められるが、解釈に多くの憶測を交えて検討しているので事実関係の誤認があったり、限定された調査範囲から推測した所見もあるので、絶対視できないことも念頭におき、更に子細な検討を望むものである。

## 5 残された課題

以上、千見遺跡の発掘調査の結果からその歴史的な位置について、この地域独自の文化のありかたを「道」、「政治的な境」といった外の世界との関係をキーワードにして分析してみた。しかし、先に繰り返しのべたように今後の類例の蓄積と検討進展に期待して結論を保留した事項も多いので、最後に今回の調査から提起される問題を再度まとめておくことにする。

### ：地形形成と遺跡

今回調査した遺跡地は現河床面から十数mの比高差をもちながらもロームの堆積は認められず、本遺跡の立地する河岸段丘の形成が縄文後期頃に進展した可能性がとらえられた。従って、本遺跡で確認された時期より古い段階はもっと高所に活動の場があり、また、段丘の分類により時期別の遺跡立地と土地利用の変遷がある程度推測することが可能ではないかと思われた。しかし、その際にこの周辺では近代や近世において大規模な土地改変がなされていることは注意される。

### ：戦国時代の遺構

今回、戦国期の遺構についてはその性格は保留にしたが、城下にさまざまな施設がある可能性は考えられた。今後の類似した環境の遺跡が確認され、類例の蓄積と分析の進展によって本遺跡の様相が再検討されることを願う。

### ：近世、近代の遺跡

本遺跡には江戸時代に善福寺、幕末から明治以後には寺子屋、学校が存在したとされるので各時期の遺構を識別するために積極的に近代も調査対象とした。本来このような時期の遺跡は登録されていないのが現状であり、この時期の扱いについては曖昧になっている。しかし、近年の中世以後の研究は学際研究の進展とともに、考古学の遺跡認識と他の歴史学研究分野での直接的な土地に残された歴史資料の絶頂の認

識にずれが生じているとも思われ、遺跡というよりも発掘調査の必要の有無はすでに考古学のみでは判断しきれない問題があるとも思われた。

文末になったが、調査や報告書の作成にあたり美麻村教育委員会の皆様や千見地籍の地元の人たちに大変お世話になったことを記すと共に、謝意を表したい。

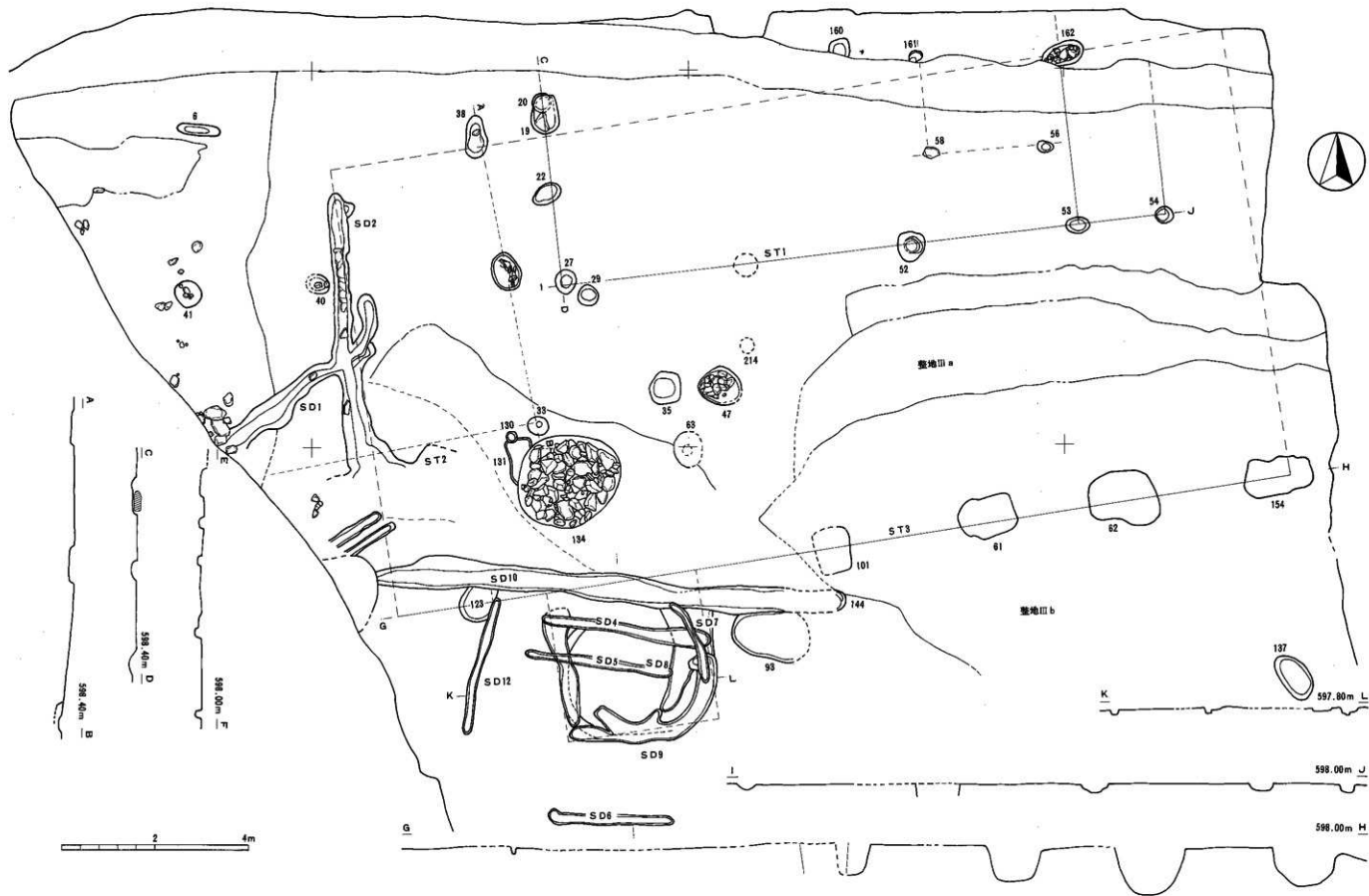
## 註

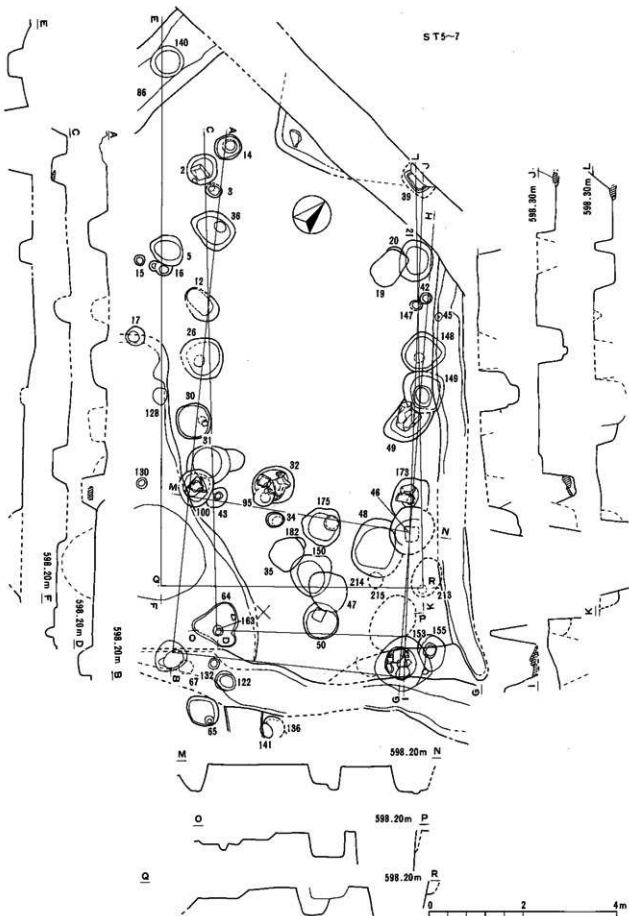
- 1 森島稔「考古編—信州新町の縄文時代」『信州新町誌』1979
- 2 註1に同じ
- 3 平林彰「北村集落の領域について」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告11 北村遺跡』1993
- 4 『宮遺跡』中条村教育委員会 1993
- 5 動物性食料の確保については半径2kmを越える可能性は指摘されている。
- 6 永峯光一・鈴木孝志「長野県埴科郡松代町西条地区入組稲業遺跡発掘調査概報」『信濃9-4』1972
- 7 棚原健「平安期にみられる山地居住民の遺跡」『信濃20-4』1968
- 8 笹沢浩「善光寺平における古墳時代以降の遺跡立地の基礎的研究」『信濃37-10』1985
- 9 高村博文「まとめ—高地集落」『横尾』川上村教育委員会 1983
- 10 能登越・澗口正史・小島敦子「山麓み出現とその背景」『信濃37-10』1985
- 11 原明芳「吉田川西遺跡の歴史的特質」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告3 吉田川西遺跡』1989
- 12 松沢一夫「中世後期Ⅰ・Ⅱ」『小川村誌』1975
- 13 篠崎健一郎「中世美麻村の山城」『美麻村遺跡分布調査報告』1992 美麻村教育委員会
- 14 『長野県の中世城館跡 分布調査報告』1983 長野県教育委員会を参照した。
- 15 齊藤慎一「上野国中山城の考察」『中世城郭研究1』1987 中世城郭研究会  
松岡 進「戦国期における「境目の城」と領域」『中世の城と考古学』新人物往来社 1991
- 16 高附武男「善福寺の秘宗」『絵報 みあさ101』美麻村公民館 1992・註13の文献
- 17 註17の高附氏の紹介文
- 18 1980年代中頃、文化人類学の研究成果を援用する研究が盛んに行なわれ、民俗学の福田アジオ氏も文化の中心と周縁に関する検討を慣用してムラの領域構成のモデルを提示した。そして、県内でもこのモデルをつかって個別事例にあたる研究が相次いで発表された。このモデルはムラがムラーノラーヤマが同心円状に配置され、周辺部が他界へつながる意識的な【外】でもあるというものであるが、同様のモデルは歴史研究において中世都市や城館の空間構成の理解に使われる場合があり、時間や空間を越えて集住する居住の理解には盛んにつかわれたモデルといえる。このモデルを使っただけの研究は個別事例にあたってモデルを検討する姿勢にあっただけと思われるが、同じモデルから派生的に導きだされる概念に規定されるところが大きく、また、各個別検討も類似した一つの元のモデルに集約されたり、究めて概念的な解釈におおいる可能性が高いせいか、近年ではあまり検討がみられないようである。しかし、道きりなど民俗儀礼まで調べたわけではないが、千見本村もこのモデルに出て散めて解釈することが可能である。
- 19 山浦寿「寺と旦那」『長野県史通史編 近世Ⅰ』1987 長野県史刊行会

## 報告章抄録

ふりがな	しゆようちほうどうながのおおまちせん まいぞうふんかざいはくつちようきほうこくしよ みあさむらないせんみいせき							
書名	主要地方道長野大町線 埋蔵文化財発掘調査報告書 美麻村内千見遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	勸長野県埋蔵文化財センター							
シリーズ番号	18							
編著者名	市川隆之							
編集機関	勸長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388 長野県長野市様ノ井布施高田佃963-4 TEL 0262-93-5926							
発行年月日	西暦 1994年 3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
せんみいせき 千見遺跡	ながのけんきたあづみぐん 長野県北安曇郡 みあさむら せんみ 美麻村 千見			36° 36′ 07″	137° 55′ 12″	1992年7月6日 ～同年8月7日	800	県道改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
千見遺跡	集落?	戦国時代	掘立柱建物跡 礎石建物跡	内耳ナベ・青磁		千見城関係遺跡?		
	寺院 ↓ (寺小屋) ↓ 学校	近世  近代	掘立柱建物跡 礎石建物跡 溝 址	2年世～近代陶磁器 ガラス 石板・石墨・石白		伝「善福寺」関係遺跡?  千見学校		



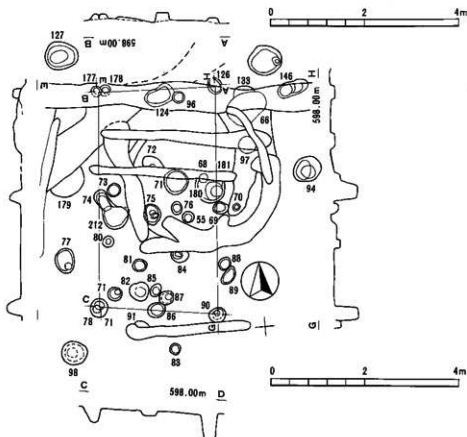
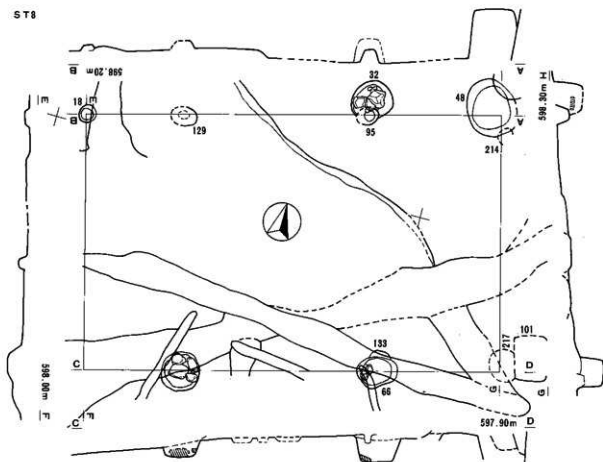




第58図 ST5~7 (数字はSK番号) (S=1/80)



ST8



第57図 ST8・9 (上はST8、下はST9、数字はSK番号) (S=1/80)



遺構	No.	時期	器物種・器種	産地	備考
SD15	5	近代	上絵磁	不明	赤、青
	6	18C	陶器	不明	灰釉
	①	19C前	染付	瀬戸・美濃	
	②	18C	陶器	肥前	京焼写
	③	不明	土器	火鉢	在池
	4	不明	陶器	不明	鉄胎陶物
	5	18C	陶器	不明	灰釉
	6	不明	磁器	不明	
	①	18C	陶器	瀬戸・美濃	灰釉
	②	18C	染付	肥前	
SD16	③	18C中	陶器	瀬戸・美濃	
	④	平安9C	須恵器	辰野坂	不明
	5	18C?	染付	肥前?	
	6	18C	陶器	在池?	初壽寺焼?
	7	18C	陶器	在池?	初壽寺焼?
	8	不明	陶器	十瓶	在池
	9	不明	陶器	櫻鉢	在池?
	10	18C	陶器	肥前	内面ルリ釉
	11	不明	陶器	不明	筒状、鉄胎
	12	18C	陶器	不明	灰釉
●SD13 SX1 SH2	13	18C	陶器	不明	灰釉
	14	不明	磁器	不明	小片
	15	不明	磁器	不明	小片
	16	不明	磁器	不明	小片
	①	19C前	染付	瀬戸・美濃	手描
	②	19C前	染付	瀬戸・美濃	手描
	③	19C前	染付	瀬戸・美濃	手描
	④	19C前	染付	瀬戸・美濃	手描
	⑤	不明	陶器	小瓶	不明
	⑥	近代	染付	不明	銅版転写
整地I	⑦	19C	陶器	灯明皿	在池
	⑧	中世?	陶器	香炉	瀬戸・美濃
	⑨	15C末	青磁	玉	中国
	⑩	19C前	染付	瀬戸・美濃	
	⑪	不明	陶器	行平	在池?
	⑫	不明	磁器	不明	在池?
	13	不明	陶器	甕?	不明
	14	不明	陶器	筒	小瓶
	15	不明	磁器	鉢	不明
	16	不明	陶器	徳利	不明
整地II	17	不明	陶器	鉢	松代焼?
	18	18C	陶器	不明	灰釉
	19	不明	陶器	徳利	不明
	20	不明	せっぽ器	不明	型打
	21	不明	せっぽ器	大甕	在池?
	22	不明	染付	不明	型打
	23	不明	染付	徳利	不明
	24	不明	染付	皿	不明
	25	18C	陶器	赤青茶碗	瀬戸・美濃
	整地III	①	近代	染付	小瓶
②		近代	上絵磁	不明	紙型摺
③		近代	青磁	小瓶	不明
④		近代	染付	小瓶	不明
⑤		近代	青磁	小瓶	不明
⑥		19C前	染付	皿	不明
⑦		近代	染付	皿	不明
⑧		近代	染付	小瓶	不明
⑨		近代	染付	小瓶	不明
⑩		19C前	陶器	瀬戸・美濃	銅版転写
整地IV (褐色期)	⑪	18C前	染付	不明	在池?
	⑫	19C前	磁器	紅土	瀬戸・美濃
	⑬	18C	陶器	不明	不明
	⑭	19C前	陶器	櫻鉢	在池
	⑮	15C末	古瀬戸	脚盤	瀬戸・美濃
	⑯	近代	磁器	皿	小瓶
	17	不明	磁器	碗?	不明
	18	不明	瓦葺土器	大甕	不明
	①	平安末	白磁	不明	中国
	②	18C	土器	内耳	
1トレ	3	中世	土器	カワラケ	
	4	18C	陶器	不明	不明
	5	不明	青磁?	不明	不明
	6	18C	染付	徳利	肥前
	7	縄文	縄文土器		
	1	不明	陶器	灯明皿	在池
	2	近代?	瓦		
	3	近代	染付	不明	不明
	4	近代	染付	不明	不明
	5	不明	小瓶	不明	不明
2トレ	4	不明	せっぽ器	不明	不明
	5	18C	陶器	不明	不明
	6	18C	陶器	不明	不明
	7	18C中	陶器	赤青茶碗	瀬戸・美濃
	8	近代?	瓦		
	1	15C	古瀬戸	鉢物小皿	瀬戸・美濃
	2	18C	染付	不明	不明
	3	不明	染付	不明	不明
	4	19C前	染付	瀬戸・美濃?	手描
	5	19C前	染付	不明	不明
整地V	6	近代	染付	不明	不明
	7	近代	染付	不明	不明
	8	近代	染付	不明	不明

遺構	No.	時期	発物種・記録	産地	備考
	9	近代	染付 小瓶	不明	
	10	不明	染付 小瓶	不明	
	11	不明	磁器 小瓶	不明	紙型摺
	12	近代	染付 小瓶	不明	
	13	近代	青磁 小瓶	不明	内閣白磁
	14	近代	青磁 小瓶	不明	
	15	近代	磁器 皿	不明	
	16	不明	磁器 皿	不明	
	17	不明	染付 皿	不明	
	18	近代?	染付 皿	不明	
	19	近代	染付 磁器	不明	
	20	近代	染付 磁器	不明	銅版転写
	21	近代	染付 磁器	不明	銅版転写
	22	不明	染付 水筒	不明	タタラ作り?
	23	不明	磁器 水筒	不明	タタラ作り?
	24	不明	磁器 不明	不明	
	25	不明	磁器 不明	不明	
	26	18C	陶器 碗	不明	灰釉
	27	18C	陶器 碗	不明	灰釉
	28	18C	陶器 碗	不明	灰釉
	29	18C	陶器 碗	不明	灰釉
	30	18C前	陶器 碗	肥前	内閣赤リ釉
	31	不明	陶器 灯明皿	在池	灰釉
	32	不明	陶器 蓋	在池	灰釉
	33	19C前	陶器 片口	松代	
	34	19C前	陶器 蓋	松代	
	35	不明	陶器 土瓶	在池	
	36	不明	陶器 土瓶	在池	
	37	不明	陶器 土瓶	在池	
	38	不明	せっ器 土瓶	在池	
	39	不明	陶器 土瓶	在池	
	40	不明	せっ器 土瓶	在池	
	41	不明	土器 羽釜	在池	羽山焼?
	42	不明	陶器 壺	在池	
	43	不明	陶器 人甕	在池	
	44	不明	陶器 火鉢	在池	SK26と同一
	45	平安9C	内蔵 杯		
	46	16C	土器 内耳		厚城
	47	16C	土器 内耳		
	48	16C	土器 内耳		
	49	近代?	瓦		
出土地点	1	不明	磁器 碗	不明	
不明	2	19C前	染付 碗	瀬戸・美濃	手描
	3	近代	染付 碗	不明	銅版転写、黒色
	4	近代	上絵皿	碗	赤上絵
	5	近代	染付 小瓶	不明	銅版転写?
	6	不明	染付 小瓶	不明	手描
	7	近代	染付 小瓶	不明	白線染紙
	8	近代	染付 小瓶	不明	銅版転写?
	9	近代	染付 小瓶	不明	銅版転写?
	10	近代	青磁 小瓶	不明	
	11	近代	染付 皿	不明	紙型摺
	12	近代	染付 皿	不明	紙型摺
	13	不明	磁器 皿	不明	口筒
	14	不明	染付 磁器	不明	手描
	15	不明	磁器 不明	不明	型打
	16	不明	磁器 不明	不明	型打
	17	不明	磁器 不明	不明	型打
	18	不明	磁器 不明	不明	
	19	不明	磁器 不明	不明	内閣無釉
	20	18C	陶器 碗	不明	灰釉(相傳寺?)
	21	不明	陶器 灯明皿	在池	
	22	不明	陶器 蓋	在池	
	23	不明	陶器 雑味	在池	
	24	不明	土器 火鉢	在池	
	25	16C	土器 内耳		
	26	縄文	縄文土器		
	27	近代?	瓦		2次加工

表4 SK-一覧

No.	1m割付	長さ	幅	深さ	道構	検出面
1	A-7	46	38	12		
2	A-8	68	66	34	ST6	
3	A-8	34	30	16		
4	A-8	170	64	70		
5	A-8	74	60	36	ST7	
6	A-7	90	20	17		
7	A-7	32	30	13		
8	A-7	24	24	18		
9	A-7	18	18	6		
10	A-8	74	54	16		
11	A-8	74	66	22	ST7?	
12	A-8	80	54	36	ST6	
13	A-8	28	18	40		
14	A-8	56	54	18		
15	A-8	22	22	12		
16	A-8	48	28	11		
17	A-8	42	40	11		整地Ⅱ上
18	A-8	36	32	14	ST8	
19	A-8	82	54	10	ST1	
20	A-8	42	30	26	ST1?	
21	A-8	82	64	44	ST7	
22	A-8	54	42	10	ST1	
23	A-8	82	70	10		
24	A-8	64	58	18		
25	A-8	78	58	10	ST2	
26	A-8	94	86	34	ST5	
27	A-8	52	44	12	ST1	
28	A-8	60	56	26		
29	A-8	46	42	10	ST1?	
30	A-8	80	78	38	ST6	
31	A-8	92	82	40	ST5	
32	A-8	90	80	(80)	ST8	
33	A-8	46	40	11	ST2	整地Ⅱ上
34	A-8	40	32	36		
35	A-8	70	64	42		
36	A-8	90	70	56	ST5	
37	A-8	45	20	14		
38	A-8	88	40	8	ST-2	
39	A-3	56	22	不明	ST6	
40	A-8	42	32	10	ST-2	
41	A-7	60	56	8	ST-2	
42	A-8	24	22	38		
43	A-8	48	36	50		
44	A-8	20	20	13		

No.	1m割付	長さ	幅	深さ	道構	検出面
45	A-8	14	14	18		
46	A-9	100	48	66	ST5	
47	A-9	92	78	30		
48	A-9	122	98	100	ST-8	
49	A-8	90	74	52	ST7	
50	A-9	80	76	48	ST5	
51	A-8	24	16	不明		
52	A-9	64	60	22	ST1	
53	A-10	50	35	18	ST1	
54	A-10	36	35	6	ST1	
55	A-13	22	22	8	ST-9	
56	A-9	34	26	17	ST-4	
57	A-9	22	18	10		
58	A-9 (石)	—	—	7	ST-4	
59	A-9 A-10	28	22	32		
60	A-10	22	18	3		
61	A-14	120	84	68	ST-3	
62	A-15	138	125	97	ST-3	
63	A-8 A-9 A-13 A-14	78	30	16		整地Ⅱ上
64	A-13 A-14	96	88	14	ST5	整地Ⅱ下
65	A-14	74	64	10		
66	A-13 A-14	88	72	64	ST-8	
67	A-13	30	14	10		
68	A-13	18	16	11	ST-9	
69	A-13	32	24	10	ST-9	
70	A-13	14	14	16		
71	A-13	52	50	25	ST-9	
72	A-13	46	22	10	ST-9	
73	A-13	18	16	8	ST-9	
74	A-13	36	24	24	ST-9	
75	A-13	44	34	31	ST-9	
76	A-13	26	22	8	ST-9	
77	A-13	56	42	38		
78	A-13	40	40	34	ST-9	
79	A-13	30	28	20		
80	A-13	22	20	6	ST-9	
81	A-13	32	24	8	ST-9	
82	A-13	44	40	52	ST-9	
83	A-18	22	22	10		
84	A-13	38	24	23	ST-9	

No.	1 m割付	長cm	短cm	厚δm	遺構	検出面
85	A-13	30	22	14	ST-9	
86	A-13	38	30	11	ST-9	
87	A-13	34	30	20	ST-9	
88	A-13	28	26	26		
89	A-13	42	24	20		
90	A-13	38	30	(62)	ST-9	
91	A-13	24	12	20		
92	A-18	30	28	18		
93	A-14	132	106	14		
94	A-14	60	54	18		
95	A-8	42	14	28	ST-8	
96	A-13	16	12	14	ST-9	
97	A-13 A-14	64	36	14		
98	A-13 A-18	56	52	48		
99	A-18	38	28	4		
100	A-8	76	74	32	ST5?	
101	A-14	86	52	32	ST-3	
102	A-9 A-14	28	24	14	ST1	
103	A-14	24	22	18		
104	A-14	34	26	20	SA1	
105	A-14	42	32	35	SA1	
106	A-14	28	28	10	SA1	
107	A-14	42	40	18	SA1	
108	A-14	30	25	20	SA1	
109	A-14	30	26	22	SA1	
110	A-14	80	80	52	SA1	
111	A-14	58	58	54	SA1	
112	A-14	66	62	42	SA1	
113	A-14	30	24	46	ST1	
114	A-14	28	26	18	SA1	
115	A-14	30	28	42	SA1?	東3面(4面の可能性あり)
116	A-15	34	22	36	SA1?	東3面(4面の可能性あり)
117	A-14	26	24	12	SA1?	東3面(4面の可能性あり)
118	A-15	44	16	34	SA1?	東3面(4面の可能性あり)
119	A-14	24	24	16		
120	A-20	40	22	20	SA1	東4面(縄文包含層上面)
121	A-20	30	26	6	SA1	
122	A-14	44	42	34		
123	A-13	68	65	11	ST-3	
124	A-13	62	36	29		
125	A-13	35	32	20		
126	A-13	40	28	12	ST-9	

No.	1 m割付	長cm	短cm	厚δm	遺構	検出面
127	A-13	68	60	46		
128	A-8	36	32	28	ST7	整地II下
129	A-8	36	34	20	ST-8	整地II下
130	A-8	24	22	12		整地II下
131	A-8 A-13	98	58	(14)		整地II下
132	A-13 A-14	25	24	10		
133	A-13 A-14	48	12	32	ST-8	
134	A-8 A-13	232	196	76		
135	A-13	70	62	35	ST5	
136	A-13	22	20	13	ST5?	整地II下
137	A-15	98	60	14		
138	A-24	20	18	17	SA2	岩盤上
139	A-24	24	20	13	SA2	岩盤上
140	A-7	68	64	32	ST7	
141	A-14	34	24	32		
142	A-14	28	24	36		
143	A-14	26	22	10	SA1	
144	A-14	42	20	8		
145	A-14	36	30	26	SA1	
146	A-14	66	28	39		
147	A-8	26	16	16		
148	A-8	74	76	66	ST6	
149	A-8	92	86	86	ST5	
150	A-8 A-9	92	84	64	ST6	
151	A-14	35	32	24	SA1	
152	A-14	36	30	26	SA1	
153	A-9	110	108	(66)	ST5	
154	A-15	120	86	74	ST-3	
155	A-9	80	60	96	SA1?	
156	A-14	28	24	25	SA1	
157	A-14	28	24	26	SA1	
158	A-14	20	18	5	SA1	
159	A-14	30	28	12	SA1	
160	A-4	42	36	11		
161	A-4	26	20	23	ST-4	
162	A-4 A-5	84	52	16	ST1	
163	A-14	26	24	46		
164	A-9	46	20	42	SA1?	
165	A-14	22	20	10	SA1?	
166	A-14	20	20	6	SA1?	
167	A-20	46	38	45	SA1?	東4面(縄文包含層上面)

## 第4章 成果と課題

No.	1の割合	長さ	高さ	深さ	遺構	検出面
168	A-20	30	24	42	SA 1 ?	東3面 (4面の可能性あり)
169	A-20	28	22	23	SA 1 ?	東3面 (4面の可能性あり)
170	A-20	22	20	20	SA 1 ?	東3面 (4面の可能性あり)
171	A-20	30	25	10	SA 1	東3面 (4面の可能性あり)
172	A-20	35	24	24	SA 1	東3面 (4面の可能性あり)
173	A-9	80	72	71	ST 6	
174	A-15	24	20	(54)	SA 1	東4面
175	A-8	82	80	60		
176	A-8	26	20	18		整地II下
177	A-13	22	18	9	ST-9	
178	A-13	20	10	6	ST-9	
179	A-13	86	82	40	ST-8	
180	A-13	64	48	12	ST-9	
181	A-13	42	36	41	ST-9	
182	A-8	30	10	28		
183	A-20	32	32	12	SA 1	
184	A-20	28	18	20	SA 1	東4面 (縄文包含層上面)
185	A-20	30	22	不明	不明	
186	A-20	36	36	29	SA 1	東4面 (縄文包含層上面)
187	A-20	22	20	16	SA 1	東4面 (縄文包含層上面)
188	A-20	16	16	29	SA 1	東4面 (縄文包含層上面)
189	A-20	20	18	32	SA 1	東4面 (縄文包含層上面)
190	A-25	30	25	24	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
191	A-25	18	18	11	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
192	A-25	25	22	14	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
193	A-25	32	30	15	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
194	A-25	20	20	26	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
195	A-25	26	20	18	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
196	A-25	30	26	29	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
197	A-25	24	20	22	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
198	A-25	28	25	36	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
199	A-25	24	22	33	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
200	A-25	26	26	11	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
201	A-25	26	26	11	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
202	A-25	32	32	36	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
203	A-25	30	28	29	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
204	A-25	26	20	29	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
205	A-25	32	24	26	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
206	A-20	24	22	37	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
207	A-20	22	20	21	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
208	A-9	32	24	33		
209	A-20	不明	不明	32	SA 2	東4面 (縄文包含層上面)
210	A-9 A-10	30	15	不明		

No.	1の割合	長さ	高さ	深さ	遺構	検出面
211	A-10	52	34	7		
212	A-13	34	28	28	ST-9	
213	A-9	不明	不明	46	ST-7	
214	A-9	不明	不明	6	ST-8	
215	A-9	不明	不明	48	ST-6	
216	A-9	不明	不明	32		
217	A-14	不明	不明	40	ST-8	
218	A-15	不明	不明	(23)	SA 1 ?	東3面 (4面の可能性あり)
219	A-15	不明	不明	(18)	SA 1 ?	東3面 (4面の可能性あり)
220	A-15	不明	不明	(22)	SA 1	東3面 (4面の可能性あり)
221	A-15	不明	不明	(20)	SA 1	東3面 (4面の可能性あり)
222	A-20	446	396	(20)		東1面
223	A-19	421	180	(-)		東1面



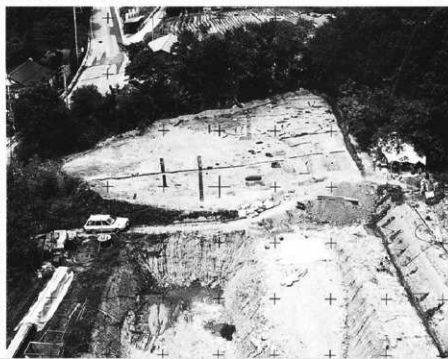




遺跡遠景  
(南東より)

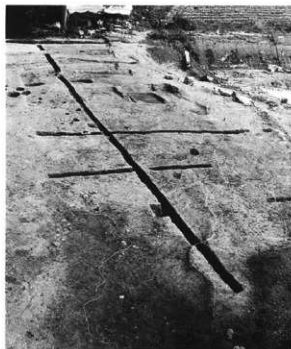
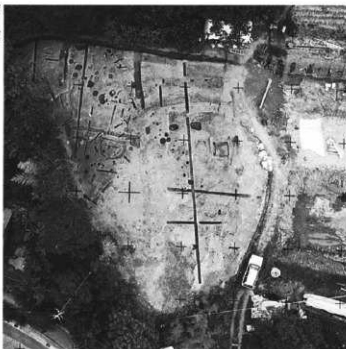


調査前風景  
(東より)



左上、千見学校門  
柱石  
左下、同 階段跡  
右、整地Ⅲb上  
面空撮  
(東より)

左. 整地Ⅲb上面  
空撮  
右. 整地Ⅲb上面  
(南より)



左. 整地下面空影  
(東上り)  
右. 整地下面  
(南より)



左. 灰黄褐色土層  
下面空撮  
右. 灰黄褐色土層  
下面(南より)





## 遺構 1

左. 東傾斜地最終面 (北より)  
右. 整地II下面 (北西より)



左. 整地I検出状況 (北より)  
右. 整地I下面 (北より)



北部遺構調査状況 (南より)



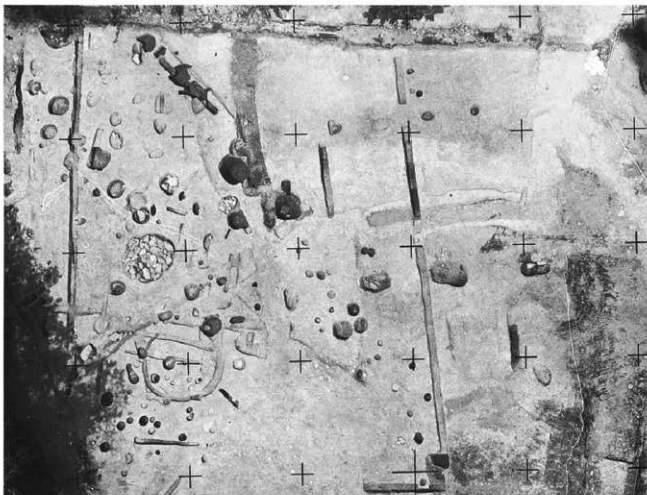
左. ST1完掘 (西より)  
右上. SK19, 20, 21切り合いセクション (東より)  
右下. SK53セクション (西より)

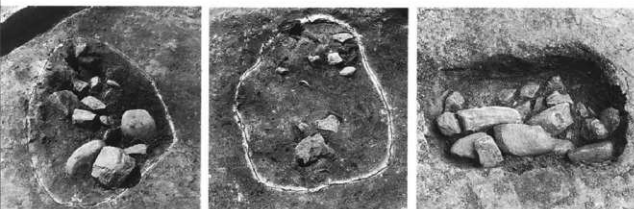


- 左, S K 162 礫出土状況  
(東より)
- 右, S K 25 礫出土状況  
(北より)



ST 3 (上空より)

ST 3 入口部  
(東より)



左. SK61(東より)  
中. SK62(東より)  
右. SK154(南より)



左. SK61断面  
(南より)  
中. SK62断面  
(南より)  
右. SK154断面  
(南より)



ST5~7(南東より)



左. SK26(西より)  
中. SK46, 48度  
出状況(東より)  
右. SK100(北より)



左. SK49(西より)  
中. SK153(北より)  
右. SK32(北より)

左, SA 1 (南より)  
右, SA 1 (北西より)



左, 南西部Pit群  
(北より)  
右, ST 5~7  
(北より)



SK 4 (南より)



左, SK134(西  
より)  
右上, SK134断  
面(南より)  
右下, SK47(南  
より)





左, SD 1・2  
(南より)  
中, SD 14 (東よ  
り)  
右, SD 14 (東よ  
り)  
SD 15・16



左, SD 3  
(南より)  
右, 同上 (南東よ  
り)



左, SD 先端 (南  
より)  
右, SH 2 (北よ  
り)



左, 北西壁土層  
(南より)  
(上部が縄文包  
含層)  
右, SQ 1 (南よ  
り)

左、SF1検出ト  
トンチ土層  
(中央最下部  
西より)  
右、SF1周辺拉  
張状況  
(南より)



左、SF1検出状  
況(南より)  
右、SF1完掘状  
況(南より)



調査終了状況  
(北東より)



工事開始後の状況  
(西より)







1



2



3



4



5



8



7



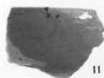
9



6



10



11



13



12



14



15



16



17



18



19



20



21

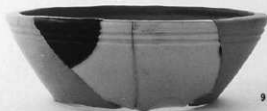
SK14~21, SK35  
(1 : 3)

1. ST5 (SK 26) (1 : 3)
- 2 - 3. ST6 (SK2) (1 : 2)
4. ST7 (SK21) (1 : 3)
- 5 - 6. ST7 (SK5) (1 : 2)
7. ST8 (SK 31) (1 : 2)
- 8 - 9. ST8 (SK47) (1 : 2)
10. SK84 (1 : 2)
- 11 - 13. SK174 (1 : 2)

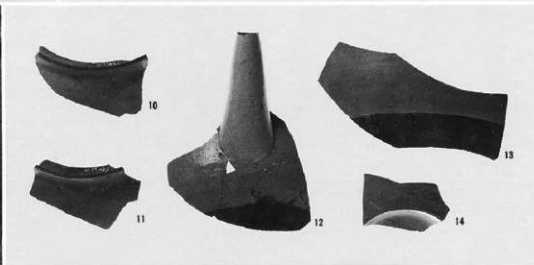
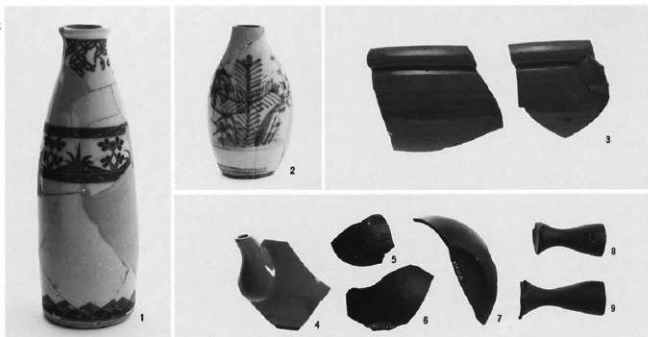
1～23, SK35  
(1:3)



1～14, SK35  
 (6～8は1:2  
 他は1:3)



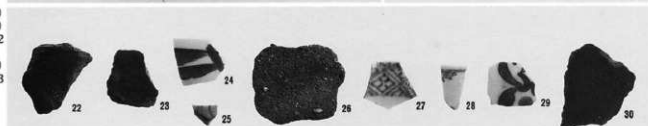
1~15. SK35  
 (1・2・7は  
 1:3, 15は1:  
 1他は1:2)

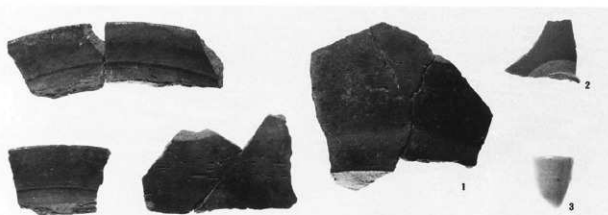


16~21. SK4  
 (16は1:3, 17  
 ~21は1:2)



22. SK34(1:2)  
 23. SK71(1:2)  
 24~26. SK62  
 (1:2)  
 27. SK66(1:2)  
 28, 29. SK93  
 (1:2)  
 30. SK213  
 (1:2)

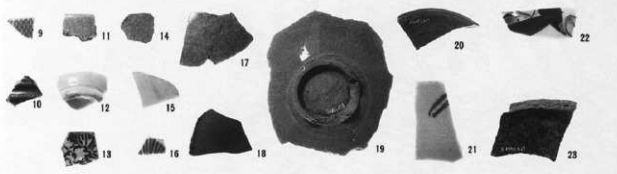




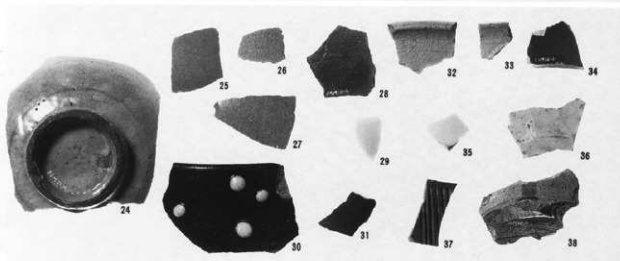
1～3, SK134  
(1:2)  
4～7, SD1  
(4は1:3, 他  
は1:2)



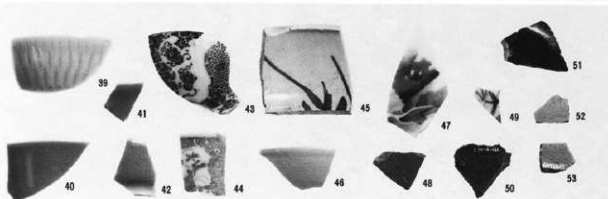
9・10, SD9  
(1:2)  
11～18, SD11  
(1:2)



19～23, SD15  
(1:2)



24～38, SD16  
(1:2)

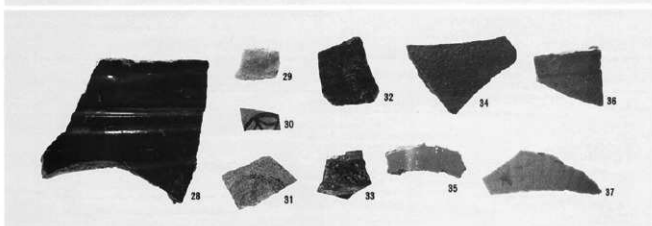
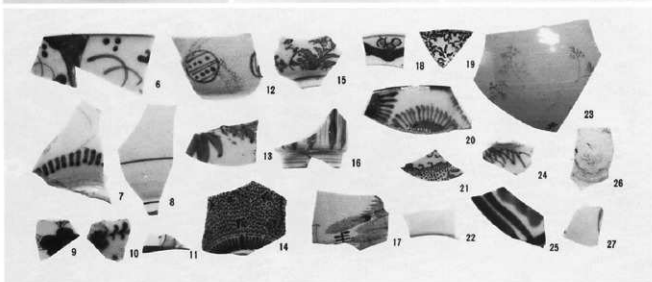


39～53, 整地 I  
(1:2)

1～3. 整地 I  
(1:3)

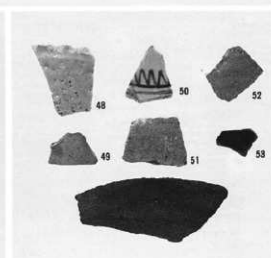
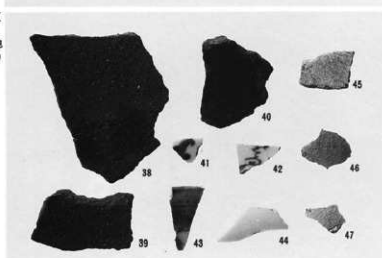


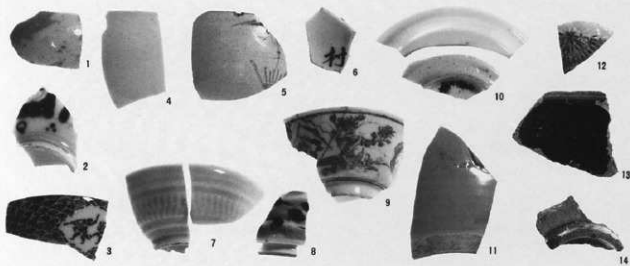
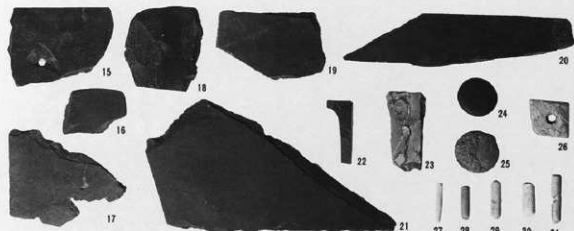
4～37. SD13・SH2・SX1  
(4・5は1:3  
他は1:2)



38～47. 整地 II  
(1:2)

48～54. 東傾斜地  
褐色土層 (1:2)



1-14. 整地Ⅲ  
(1:2)石製品、土製品  
15・16. 整地Ⅰ  
(1:2)17. S K162  
(1:2)18・19. 整地Ⅰ  
(1:2)20・21. 検出面  
(1:2)22. 不明  
(1:2)23. 不明  
(1:2)24・25. 整地Ⅰ  
(1:2)26. 不明  
(1:2)27. 不明  
(1:2)28・29. 整地Ⅱ  
(1:2)30. 不明  
(1:2)31. 整地Ⅱ  
(1:2)

32



鉄製品 (1:2)

33. 整地Ⅰ

34. 整地Ⅲ

35. 整地Ⅲ

36. S D 2

37. S D 10

38. S K 35

39. 整地Ⅲ

40. 整地Ⅰ



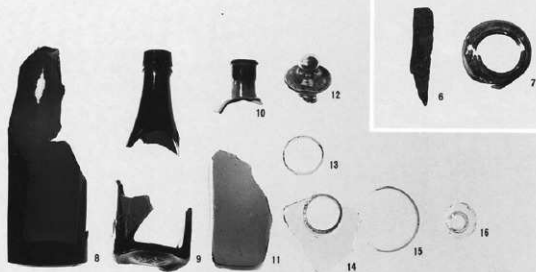
銅製品

1. 検出面(1:1)
2. S D16(1:1)
3. S K10(1:1)
4. 検出面(1:1)
5. 検出面(1:1)
6. 整地II(1:2)
7. S K35(1:2)



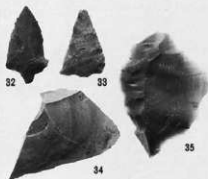
ガラス製品

- 8-16. S K35  
(1:3)



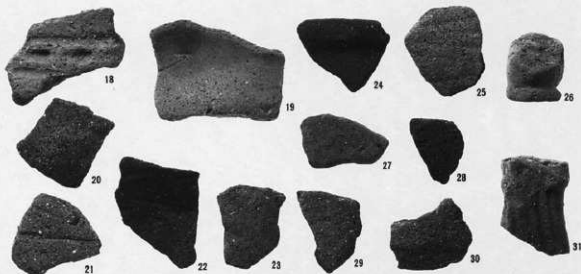
縄文土器

17. S Q 1(1:4)
- 18-19. S K215  
(1:2)
- 20-31. 包含層  
(1:2)



石器・剥片

32. 整地III(1:1)
33. 不明(1:1)
34. 整地II(1:1)
35. 不明(1:1)





財長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 18

主要地方道長野大町線埋蔵文化財発掘調査報告書

—美麻村内—

千 見 遺 跡

発 行 平 成 6 年 3 月 31 日 発 行

発行者 長 野 県 大 町 建 設 事 務 所

財長野県埋蔵文化財センター

印 刷 信 毎 書 籍 印 刷 株 式 会 社

